

—第二十二回全国高校生童話大賞—

受賞作品集

目次

はしがき	第二十二回全国高校生童話大賞実行委員会 事務局長 菊池 豊	1
☆金賞		
渡り鳥のルチア	湊 むつみ (奈良県 県立郡山高等学校三年)	4
☆銀賞		
青い氷の結晶	十川 理世 (千葉県 市川高等学校一年)	18
キャンバスの中の貴方	榊 間 茜 里 (東京都 工学院大学附属高等学校二年)	30
雨夜の星	谷 まゆみ (高知県 県立山田高等学校一年)	46
☆受賞作品一覧		60
☆第一回～第二十一回受賞作品	作品一覧	63
☆選考委員プロフィール		75

はしがき

第二十二回全国高校生童話大賞実行委員会 事務局長 菊池 豊

「全国高校生童話大賞」は、富士大学・花巻市・花巻市教育委員会が主催し、国民的童話作家である宮沢賢治が生まれ育った街、岩手県花巻市から全国の高校生に童話という夢のある自由な表現の場として豊かな創造力とみずみずしい感性を引き出す機会を提供するを目的に開催され、今回で二十二回目を迎えました。全国的にも高校生を対象とする童話コンクールとしては最も歴史があり、これまでの応募作品数は二万編を超えています。

今年もたくさんの方の応募をいただき、その作品一つ一つに込められた高校生の多種多様な想像力の世界に感心させられました。本当にありがとうございました。

さて、今年は宮沢賢治没後九十年を迎え、映画「銀河鉄道の父」が上映されるなど全国的にも大いに注目された一年となりました。三十七年の短い生涯でしたが、その旺盛な好奇心と探求力、行動力は単なる童話作家の域に留まらず、科学者であり、宗教家であり、教育者であったりと、そのわが身を顧みない活動や創作力から生み出される詩や童話九百あまりの作品は、時代を超えて今も多くの人々を魅了し続けています。宮沢賢治の作品には、小中学生が読んでもそこにどんなメッセージが含まれているか十分に理解できないが、大人になってから改めて読み返すとはじめて真意が理解できる

ものが少なくないと言われます。「大人の童話」と言われる所以がここにあります。

今年五月、人々が三年間にわたり苦しめられた新型コロナウイルス感染症は感染症法上の二類相当から五類に移行し、日常生活を取り戻しつつあります。しかし、ビジネスから日常生活に至るまで大きく変化した日常は、完全に元に戻ることはないように思われます。宮沢賢治は「十九世紀に生まれた二十一世紀の人だった」と言われます。これからの新しい時代を考えるヒントが宮沢賢治の作品の中に隠れているかもしれません。

高校生の皆さんにはぜひ賢治作品を読んでいただき、作品が醸し出す独特の雰囲気と真意を、想像力を駆使して読み解いていただきたいと思います。

最後になりますが、第二十二回全国童話大賞の開催にあたり、この夏の猛暑のなか創作活動に励み作品を応募していただきました全ての高校生の皆さん、そして各高校においてご指導くださいました先生方に深く感謝申し上げます。また、作品審査に携わっていただきました選考委員の皆さんに心から御礼申し上げます。

それでは、来年、第二十三回全国高校生童話大賞に

あなたの心の中に広がる世界を小さな童話にして、賢治のまちまで届けてください。

金

賞

『渡り鳥のルチア』

渡り鳥のルチア

奈良県 県立郡山高等学校三年 湊

むつみ

ルチアから見える世界は、青で真つ二つに割れていました。上を見れば、澄みきった青空がさんさんときらめいています。下では、呑まれそうなほど深い海の青が、静かにたたずんでいます。

こうして海の上を飛んできて、もうどれくらいになるでしょう。

ルチアは渡り鳥でした。季節によつて住む場所を変え、こうして海を渡るのです。

仲間たちは、自分が渡り鳥であることをみな誇っていました。どれだけ長くだって飛んでいられる翼の力強さもそうですし、いろんな場所を訪れる自由さも自慢だったのです。

けれどルチアは。

(……わたしは、そうは思えないな)

仲間にも言ったことがないけれど、ルチアは渡り鳥に生まれたことを、少しさびしく感じていました。

ルチアたちは、新しい街にたどりつきました。しばらくはここを根城ねじろとします。

仲間と別れ、ルチアは街を見て回ることにしました。なかなかすてきな街でした。

大通りには石畳がしきつめられ、かかとの高い靴をはいたお嬢さんが通るたび、カコッと小気味いい音が響き

ます。

もう少し奥には、巨大な木がそびえたっていました。濃く、深い緑が、陽の光に照り映えています。木はあまりに高く、てっぺんまで飛んでいくのにルチアでも苦労しました。

この木では、他の鳥たちも羽を休めているようでした。ルチアを知らない、この街にずっと住んでいる鳥たちです。

ふと耳をすませば、彼らの話が聞こえてきました。

「いや、いや。もう夏ですか。いつものことですが、時間がすぎるのは早いですね。気づけばもう冬になっていそっだ」

「あら、あたしは早く冬になってほしいわ。ほら、冬はいつも、人間たちがお祭りをしているじゃない？ そのときに屋台でつまみ食いたしたキイチゴのタルトのおいしいこと！ あの味が忘れられないの」

そこまで聞いたルチアは、表情に影を落とすと、そっと木を飛び去りました。

冬のお祭り……ルチアは冬、この街にはいません。もっと暖かい南に行くのですから。

じつは、これこそがまさに、ルチアがさびしさを感じる原因でした。

ルチアたち渡り鳥は季節によって住む場所を変えます。その土地の限られた側面しか知ることができないのです。

お祭りってどんなのでしょうか。冬、この木はどんな風になるのでしょうか。あの噴水の水も、凍ってしまうのでしょうか。

(……冬の景色って、どんななんだろう)

ルチアには知るすべもありません。街の、ほんのちよつとの姿しか知り得ない自分はよそののだと、ルチアはひっそり嘆きました。

街の片隅には、小さな広場がありました。緑におおわれていて心地よく、ルチアはそこで羽を休めていくことにしました。

……木陰にたたずむうちに、ルチアは居眠りしてしまったようです。ふと気づけば、太陽の位置が変わっていました。

帰りが遅くなつて、仲間にお小言を言われるのはごめんです。そろそろここを飛び去ろうと身をよじつて。

「ああ、待つて待つて。待つてくれないか？」

どこからか、そんな声が飛んできました。ルチアが声の主を探してみると、少し離れたベンチに座る人間の青年に気づきました。彼は筆を握り、何やら紙に走らせています。

「今、あなたがわたしに話しかけたの？」

ルチアが尋ねると、彼は大仰に頷いて、紙を見せてくれました。

「そうだよ。ほら、見てくれ。今、きみをモチーフに絵を描いているんだ。もしきみが嫌じゃなければ、もう少し、そこについて付き合ってくれないかい？」

青年が差し出した描きかけの絵を、ルチアはじつと眺めます。風景をそのまま切り取ったような緻密さで、けれど現実よりも鮮やかに、劇的に、広場の様子が描かれています。

なかなか素晴らしい、とルチアは思いました。自分もここに描かれるのか、なるほどきつと、悪くない。

「……いいよ。あなたのモデルになってあげる。そのかわり、しばらくおしゃべりに付き合つてよ」

本当にただの気まぐれでした。けれど画家の絵に惹かれ、ルチアは初めて、人間との時間を過ごし始めます。

黙って座っているのも退屈ですし、ルチアはあれこれ青年に話しかけてみました。彼は休みなく手を動かしながらも、気さくにルチアに答えてくれます。

青年は画家だと名乗りました。こうして絵を描いては売っているというのですが、あまり売れ行きはよくないそうです。まだまだ絵だけでは食べていけない、と気恥ずかしそうに言いました。

「ほら、ぼくなんかの話はこれくらいいいじゃないか……それより、きみの話を聞かせておくれよ！」

画家はふと、目をきらきらと輝かせてそう言いました。ルチアの羽やくちばしを、興味深そうにじつと眺めます。「きみは、渡り鳥なんだろう？　ぼくよりもずっと、広くて色とりどりの世界を知ってるんじゃないのかい？」

画家は筆を置いて、ルチアにずっと詰め寄ります。その眼差しがあまりに期待に満ちているものですから、ルチアの方がたじろいでしまいました。

「海を渡るだけだよ……知っていることなんて、あなたと大差ないと思うけれど」

「そんなことないよ！　海に向こうには、こことはまるでちがう文化があるって、本で読んだんだ」

画家は懂れを語ります。

「北の半島の街には、豪華絢爛な大聖堂があるんだって。ぼくの尊敬する画家の壁画がそこにあつてね、一度でいいから見てみたいなあ。南の方は、めずらしい花や食べ物がんさかあつて、海はエメラルドに輝くそうなんだ。とってもすてきだと思わないかい？」

そんなふうに、画家はいろんな土地のいろんな特徴を挙げていきました。翼のない人間なのに、よく知っているなどルチアは感心しました。画家の表情は生き生きとしていて、ルチアもなんだか楽しくなります。

「わたしは南からきたけれどね。うん、南の海はたしかに緑色をしているよ。あまり気に留めなかったけれど……エメラルドみたいで、たしかにきれいだ」

「たくさんの景色を知って、見える世界を広げたら、きつともっといい絵が描けると思うんだ。だからぼくは、きみがうらやましいよ。どこへだって飛んでいける、自由なきみが」

その言葉がルチアの胸を刺しました。

「……それは。……どうだろうね」

画家の羨望せんぼうの眼差しを、ルチアは素直に受け止められませんでした。ルチアは渡り鳥に生まれた自分が、好きではないのですから。表情を暗くしたルチアに、画家は気づきます。

「ごめん、ぼくはなにか、気にさわることを言ってしまったかな？」

「あなたは悪くないよ。ただ、わたしが……わたしは、渡り鳥って、さびしいものだと思ってしまっただけ」
「やぶいっ」

画家は首をかしげました。画家がまっすぐにルチアを見つめるので、ルチアは不思議と、仲間にも話したことのない自分の秘密を、彼になら話してみたいと思ってしまいました。

「わたしたち渡り鳥は、その土地の限られた面しか知ることはできないの。わたしは……本当はあなたみたいになんか同じ街にずっと住んで、そこを故郷だなんて呼んでみたい……そして、冬の景色を見してみたいな」

「真逆だね、ぼくたちは。世界を巡りたいばかりと、一つの街にだけとどまりたいきみ」

「わたしたちって、結局、ないものねだりをしているだけなのかしら」

ルチアはため息をつきました。渡り鳥らしからぬ願いを抱く自分がいやになってきます。けれどそんなルチアに、画家は笑いかけました。

「それって別に、悪いことじゃないだろ？ 憧れを追い求める心が、ぼくたちの原動力だ。冬景色を見たいと言ったきみの顔は、とてもすてきに思えたよ」

画家はさらに言葉を重ねます。

「でも、よそのものだなんて思わなくていい。きみはもつぼくの友達だ。ぼくらは住む世界がちがうけど、だからこそ、お互いを補えるんだろ？」

そこでルチアの心が、ふつと軽くなった気がしました。渡り鳥の自分と、これまで仲間にも言えなかった願いが、ルチアは初めて認められた気がしたのです。

こうしてルチアは画家を気に入り、この広場をよく訪れるようになりました。

もちろん、ルチアだって仲間とエサを探したり巣を守ったりしなくてはなりませんから、毎日画家と会うわけにはいきません。けれどルチアが暇ひまを見つけてはやってくるたび、画家は喜んで迎えてくれました。

「今日は雪まつりの話をしてあげるよー」

ルチアと画家は、きまってそういう話をしました。画家はルチアのために、この街の冬の様子を話してくれました。かわりにルチアは画家のために、これまで見てきたさまざまな土地のことを語ってあげました。

まったくちがうはずのルチアと画家の生活が、この刹那せうなだけは交わったのです。誰かと世界を分かち合うこと

が、こんなにも楽しいのだとルチアは初めて知りました。たとえこの目で直接見ることは叶わなくても、焦がれた冬の景色を、画家のおかげで知ることができたのです。ただそれだけのことが、どれほどルチアの心を照らしたでしょう。

だからでしょうか。ルチアは画家に、お礼のようなことをしたくなったのです。

ルチアは、いろいろ悩んだ挙句、画家へのプレゼントを木の実に決めました。この街にきて初めて食べた種類なのですが、その美味しさに感動した覚えがあるのです。市場なんかで売っているところも見ただことないですし、高い木のとっぺんに実っているので、画家でもぎつと食べたことがないはずですよ。

「ふふん。わたしだって、あなたが知らないこの街の魅力を見つけられるんだから」

ルチアは意気揚々と、木のとっぺんめがけて飛んでいきます。連なるようになって、赤い小さな木の実にち。それをくちばしでつまもつとしますが、

「ちよっと！ よそものになにしているの」

不意に割って入った声に、驚いて、ルチアは動きを止めました。

いつのまにか、何羽もの鳥たちに囲まれていました。ルチアの仲間ではありません。この街にもとから住む鳥たちです。

「この木の実は、とても美味しくて、そのうえ貴重なんだ」

「よそものになんて、あげられないわ？」

「この街の鳥じゃないあんたらが、わがもの顔で飛び回っているのも腹立たしいのに、この木の実まで奪おうなんておぼろけっ！」

そうして集まった鳥たちは、いつせいにわめき始めました。木の実をおいていけだの、早く街から出ていけだの、彼らがルチアたちを快く思っていないのが、ありありと伝わってきます。

ルチアは、心が冷えていくのを感じました。やっぱり自分は異物なんだ、そんなふうに思ってしまったて、胸が苦しくなります。

——けれど。そんなルチアをすくい上げるように、画家の声がふと頭に響いてきました。

『よそのものなんて思わなくていい』

『きみはぼくの友達だ』

そうだ、彼がそう言ってくれたじゃあないか。なにも引け目を感じる必要などありません。ルチアはルチアらしく、自分の願いを追えばいいのです。

（この鳥たちによそのものと言われたって……わたしには彼という友達がいるんだから！）

ルチアはそう自分を鼓舞して、木の実をいくつかくわえると、鳥たちの包囲を抜けて逃げました。

渡り鳥の力強い羽ばたきに、彼らが追いつけるはずありません。

そうしてルチアはいつもの広場で、画家に取ってきた木の実をこちそうしました。

「わあー！ とても美味しいよ。ありがとう」

「へへ、他の鳥たちにはいろいろ言われてしまったんだけどね。あなたのおかげで、わたしはわたしを肯定できたの」

そう胸を張って言いながら、ルチアも木の実をひと粒ついばみました。

ルチアの心の在り方は、たしかに変わっていました。

ルチアと画家は、以前よりも仲良くなつて、さらに心を通わせるようになりました。

けれど終わりは必ずやってきます。ルチアは冬になる前に、この街を発^たたなくてはならないのですから。とうとうそのときはやってきました。

「……二日後、わたしたちはこの街を出ることになったよ。あなたともつ、お別れだ」

「そっか……もつ、冬が近いからね」

別れがくることなんて、わかりきっていました。ルチアは渡り鳥で、画家は定住者。本当なら交わることはない関係なのです。

画家もそれはわかっているようでした。少しさびしそうにしながらも、すぐに受け入れます。受け入れて、こんなことを言いました。

「ねえルチア。きみも、いろいろといそがしいだろうけど……最後の日も、ぼくに会いにきてくれないかい？」

「もちろんだよ！ わたしだってあなたのことを、友達だと思っているんだから」

言われなくても、初めからそのつもりでした。ルチアだって、もう画家と会えないのはさびしいのです。しっかりと、別れを告げる気でいました。

「仲間と旅立つ準備をしなくちゃいけないから、たくさんは会えないけど……最後の日は必ず、あなたに会いに来るよ」

ルチアと画家は、そう約束しました。

それから旅立ちの日まで、ルチアは画家と一度も会えませんでした。暇なときにあの広場をのぞいたこともあ

るのですが、めずらしく、画家はそこにいませんでした。

そのままとうとう、別れの日が訪れます。

「ああ、よかった。きてくれた」

広場に舞い降りたルチアを見て、画家はほっと安心したように息を吐きました。

「当たり前だよ。だって約束したじゃない」

そう答えながら、ルチアは、画家が何やら大きな板を持っていることに気づきました。両手でようやく抱えられるような大きさで、布がはりつけられた厚い板です。

「……もしかして」ルチアは気づきました。

「あなたが持っているのはキャンバス？」

「そう！ そうだよ。これを、きみに見てほしかったんだ。きみへのプレゼントだよ」

画家は嬉しそうに頬ほおをゆるめると「じゃーん」なんて言いながら、そのキャンバスをルチアに見せてくれました。

「きみのために描いたんだ……言ってただろう？ きみは、この街の冬の様子を知っていたって。実物はむりでも、ぼくの絵でなら、きみに冬を見せてあげられると思ったんだ」

それは、雪におおわれたこの街の絵でした。建物のやねも、木も、すべてが真白はかなに包まれて輝いています。降りしきる雪の綿は、小さくてぼんやりとしていて、今にも溶けていきそうです。儚はかなくて、美しいのです。

ルチアの知りえない冬景色が、今たしかに、画家の絵のなかに広がっていました。

「……きわい」

ぼつりともれたルチアのつぶやきを聞いて、画家は満足そうにうなずきます。

憧れた雪景色を、ルチアはじっと眺めます。長旅にこの絵を持っていくことはできません。せめていつでも思い出せるようにと、絵を目に焼きつけていきます。

「……ありがとつ、本当に。あなたは、世界一の絵描きだよー」

ルチアはそう画家を称たたえました。画家ははにかみながら。

「礼を言うのはぼくのほうだよ。この絵はぼくが今まで描いたなかでいちばんの傑けっさく作だ。きみのために……友達のために描いた絵だから、きつとこんなに美しく描けたんだ。きみに出会えて、本当によかった」

「わたしも、あなたに会えてよかった」

まぎれもない本心でした。

ルチアはこれまで、土地を旅立つたび、悲しさを感じてきました。もつとここにいたいと思ってしまいました。けれど今回は。画家が知らない世界を知る楽しさを、あんなに生き生きと語ってくれたから。新たな世界に立つことが、ルチアはいつもより怖くないのです。怖くないどころか、胸がわくわくとはじけているのです。

「また会える保証はない……でもわたしは、あなたのために、すみずみまで世界を見てくるよ。またあなたと会えたとき、こんな場所があったって教えてあげられるようにー」

「ぼくも、きみのために絵を描こう。きみが知らない冬の景色をたくさん描きためて、またきみに見せてあげる」

一羽と一人のなないものねだりが、歯車のように噛み合った瞬間でした。お互いの夢をお互いが補って、新しい願いが紡つむがれます。

「さようなら、また会つ日まで。わたしはあなたのこと、絶対に忘れないから」

ルチアの言葉に、画家は力強くうなずきました。

「ぼくもきみを忘れない。きみと話した時間は、ぼくの宝物だ、忘れるもんか」

ルチアが最後に見た画家の笑顔は、とびきりまぶしく輝いていました。

「さよなら、ルチア。きみのこれからの旅路が、よきものでありますように――」

画家と別れ、街を飛び立つ直前、ルチアは浜辺に立ち寄りました。仲間の何羽かはもうすでに出発していて、水平線上に彼らの姿が見えます。

すてきな友達に出会いました。画家のおかげでルチアは、こうして前向きに、海を渡っていくことができま
す。長い目で見ればほんのわずかの彼との邂逅が、今ルチアの心を奥底から照らしていました。

ルチアは渡り鳥。一つの土地になじみきることはできないけれど、そのかわりたくさんの世界を知れる。誰か
と言葉を交わせば、ルチアは知りえない土地の別の姿にだって触れられる。

かつてない希望に浮かされるまま、ルチアは浜辺に絵を描きました。画家のまねごとです。翼と足を使って、
砂にゆるやかな曲線を引いていきます。

できあがったそれは、何がモチーフかもわからなくて、絵と呼ぶにはあまりに不格好だったけれど。

ルチアはそれをしばらく眺め、やがて満足げにうなずきました。そうして、今度こそ、街を去り、南へと出発
します。

ルチアが飛び去ってしばらくしたころ、ルチアの残した絵もどきは、寄せては引く波に流され、消えていきま
した。

選考委員コメント

『渡り鳥のルチャ』

石野

晶

スツと頭に入ってくる文章で、情景が目には浮かびます。渡り鳥なのにその土地の冬を知りたいと願うルチャ。街にとってよそのだと嘆くルチャは、きっと仲間の中でも異分子なのでしょう。そんなルチャは、世界を巡りたいと願う画家と仲良くなります。お互いの夢をお互いが補うことで、前向きに生きられるという明るいラストがよかったです。

夏井

敬雄

渡り鳥と画家との出会いと別れの物語です。渡り鳥のルチャは、どこにでも飛んでいける自由さよりも、同じ街に住みたいと願います。しかし、世界中を巡りたいと思う画家と出会い、「ないものねだり——憧れを追い求める心が生きる原動力」だと知のです。語り手は「異なる者の異なる夢をお互いが補って新しい願いが紡がれる」と言います。ラストシーンはとても印象的です。私たちは形なきものに突き動かされて、今を生きる。砂浜に描かれ、消え去るルチャの絵は、そう語っているようです。

やえがしなおこ

渡り鳥の定めにさびしさを感じているルチャと、遠い世界への憧れを抱く青年画家が心を通わせ、お互いの魂を高め合っていく過程が詩的に描かれ、童話大賞にふさわしい作品です。人と動物の交流や、心の葛藤を描く世界はまた、賢治作品に通じるものがあります。しっかりと主題をつかんだ構成力、美しいイメージと描写力も見事です。これから書き続けてほしいと思います。

銀

賞

『青い氷の結晶』

青い氷の結晶

千葉県 市川高等学校一年 十^そ川^{がわ}理^り世^よ

レモン色の太陽の真下にある真っ白な雪山。その高い山の頂上には木でできた小さな小屋がぽつんとある。少しヒビが入っていてもろそうだが、小さくてかわいい。

そう、その小屋だ。その小屋で、おじいさんは一人で暮らしている。

真っ白な髭^{ひげ}に淡い青色の瞳。メタルフレームのオーバル型のメガネ。そんなおじいさんは薬屋だ。山の麓^{ふもと}にある街に住んでいる人たちのために、毎日薬を作っている。風邪^{かぜ}薬、塗り^ぬ薬、咳止^{せきどめ}め。山で取れる薬草からいろいろな薬を作っている。

あまりにも薬がよく効くため、おじいさんは街のみんなから山の「魔法使いさん」と呼ばれている。

「おばあちゃんの腰が悪くなっちゃったの。魔法使いさん、塗り薬ちよーだい!」

「魔法使いさん、最近この子がどうにも咳が止まらなくて。良い咳止め、もらえないかしら?」街のみんなはそつおじいさんと呼び、薬を買っては次の日に小屋に戻り、

「効いたよ! ありがとう」

と、おじいさんに笑顔で言う。

だが、おじいさんはただの素晴らしい薬屋ではない。本物の魔法使いだ。魔法使い、とは言っても、箒に乗って空を飛んだり、杖を使って魔法を使ったりすることはない。おじいさんの魔法は水と植物の魔法だ。道具なんて必要ない。

そんなおじいさんの趣味は、人々の幸せな思い出を雲に閉じ込めること。街の人々の幸せな思い出を淡い青色の雲に閉じ込め、見たい時に見られるようにしている。街のみんなが薬を買いに来ない時は、その雲の中に閉じ込めた温かい思い出を見て幸せに過ごしている。

おじいさんはずっと一人暮らしだ。しかし、ずっとみんなと繋がっているから一度も寂しいと感じたことはない。

ある朝。おじいさんの山の付近を今までにない吹雪が襲う。大雪と強風のせいで山の頂上にある薬屋に街のみんなは来ることができない。悲しいことに、吹雪はそう簡単には止まず、おじいさんが街のみんなと会えない日は長い間続く。

やることがないおじいさんは部屋の角にある、古い木の戸棚を開ける。中にはたくさんさんの緑色の植物が綺麗に並べられている。おじいさんは一番手前の植物を見る。そして、もふもふとした葉っぱに乗る小さな雲を指先で触れる。

すると、小さな雲は宙に浮かぶ。宙に浮かんたまま、どんどん大きくなっていく。おじいさんはその雲を優しい眼差しで見る。淡い青色の雲はお皿ほどの大きさになってから、いきなり止まる。

パーン、と音を鳴らして弾ける。弾けた雫の粒が丸く弧を描き、円になる。円の中をおじいさんは淡い青色の瞳でじーっと見つめる。

すると、円の中から赤ちゃんの幼い笑い声が聞こえる。幸せそうな笑い声のポリウムが段々と大きくなり、おじいさんの耳元に響く。と同時に、粒の円の中にニコニコと嬉しそうに笑う赤ちゃんの愛らしい顔が映る。

「魔法使いさんのお陰でこんなに元氣になりましたよ。本当にありがとございます」

優しく赤ちゃんを抱きながら、おじいさんに向かって母親は言う。そしてにっこりと微笑む。

おじいさんはそんな母親の笑顔を見て思う。あの赤ちゃんも今はもう立派な男の子だ。皮でできたリュックを背負って、学校に通っている。スポーツにも励んでいるそうだ。

スーッと粒が元の雫に戻る。ポタツ、と音がして雫が元の葉っぱの上の位置に戻る。

おじいさんは微笑む。そして、次の雫に手を伸ばす。

おじいさんは思い出を片っ端から見っていく。

抱き合っている母と子。

撫でられている犬。

車から家族に向かって手を振る父。

おじいさんは見ている間、ずっと幸せだ。

雪山をはしやぎながら滑る男の子。

輪になって雪だるまを作る子供たち。

ほっぺを赤くしてフッキーを食べる女の子。

だが、何日も見ていると、おじいさんは思う。みんなに会いたい。私はずっとひとりぼっちだ。今、街のみんなは何をしているのだろう。気になる。

吹雪が強くなる。寒い風がヒューツと吹き、ヒビの入った木の窓を叩く。ガタガタツと窓が音を立てる。雪もさらに積もる。このままではこの先もしばらく外は歩けないだろう。

肌を刺すような冷たい床がおじいさんのしわしわの足の温もりを徐々に奪う。冷え込んだ空気がおじいさんの首をひんやりとさせる。

風がドアを叩くたびに心が叩かれたように、おじいさんは寂しくなる。

みんなに会いたい。街のみんなはどうしているのだろう。

あの犬は今、幸せに吠えているのだろうか。

あの女の子はあの男の子と仲良くなれただろうか。

あのお母さんは無事に赤ちゃんを産むことができただろうか。

みんなに会いたい。街のみんなは今どうしているのだろう。

凍^こえるような寒さの中、おじいさんは扉へ向かう。小屋の外に出て、藍^{あいいろ}色の空を見上げる。白い、弱々しい手を、冷たい空気をふり切りながら前に出す。

街のみんなは大丈夫だろうか。

私のことが心配だろうか。

私に会いたがっているだろうか。

おじいさんはそと、儚^{はかな}い氷の結晶を手を受け止める。そして手をゆつくりと握る。

おじいさんはそのまま小屋に戻り、古い暖^{だんろ}炉のそばに行く。ゆつたりと腰を下ろすと同時に、ゆつくりと手を開く。

開いた手から淡い青色の雫が浮かぶ。

水の雫には、大きなクリスマスツリーの周りに集まっている街の人の姿が映る。みんな、蠟^{ろうそく}燭を両手で持ちながら微笑んでいる。

楽しそうに過ごしている街の人々を見て、おじいさんは悲しくなった。

自分は魔法使いだ。だから直感でどの草が薬になるかわかった。どの草をどのようにして混ぜれば薬になるのかわかった。薬をどう体に取り込めば病^け気や怪^け我が治るか直感でわかった。街のみんなはよくおじいさんをすこいと褒^ほめた。おじいさんはみんなから笑顔で褒められるたびに自分が物知りであることを誇りに思った。

だが。

おじいさんは考えにふける。自分が誰かよくわからない。いくら薬についてはわかっていても、自分が誰なのかがわからない。ただいた。そこに。気づいたら自分はおじいさんと、魔法使いで。一人で住んでいた。山の頂上にある小屋に。

家族がいなくて、ひとりぼっちで。

本当に寂しかった。おじいさんにとっては街の人々が今までは家族だった。だが街の人々はずっと遠くにいる。この吹雪が続く限り、ずっと会えない。

しかも、自分がいけないのに、街のみんなは嬉しそうにクリスマスを祝っている。

おじいさんはその日から何も食べなくなる。

集めていた思い出も見なくなる。思い出の植物が並べられた戸棚の扉が空いたまま、おじいさんはただひたすらに、椅子に座ってボーッとすることになる。

何日か経つ。太陽が沈み、月が出て、夜になる。吹雪も止んできたが、まだ風は強く、雪も降っている。

おじいさんはいつも通り椅子に座ってボーッとしている。目の焦点が合わないまま、空間をじーっと見つめている。

時計の短針がカチツと音を鳴らして九時になる。おじいさんは時計を虚ろな目で見て、ゆっくりと立ちあがる。

うとする。

と、その時。

嗅いだことがないような柔らかい甘い香りが宙を舞う。

聞いたことがないような美しい歌がゆつくりと流れる。

見たことのないような薄紅色の空気がおじいさんを柔らかく包み込む。

おじいさんはうつとりとして目を細める。

薄紅色の空気がだんだんと白色と青色に変わっていく。

体を包み込んでいた空気が綺麗にゆつたりと外へ流れていく。

おじいさんはその光景の美しさに魅了され、何も考えられなくなる。

おじいさんの周りを白と青色の空気が円を描きながら囲む。

白と青からコーンフラワーブルーの美しい氷の花が咲く。

花に見惚れていたおじいさんの目の前の空間からいきなり、キラキラ輝くダイヤモンドダストが現れる。結晶

の光が反射して一点に集まり、そのアザーブルーの光の一点がだんだんと大きくなる。そして、アザーブルーの光が 花火のようにパーンと弾けて、光の花が咲く。

おじいさんは眩い閃光で思わず目を閉じる。

突然甘い匂いがなくなる。と同時に、音楽が止まる。空気も消える。

おじいさんは驚いて、目を開ける。目を開けた途端、おじいさんはそのまま椅子にもたれて失神する。

おじいさんの目の前にはこの世のものではないと断言できるほどの、美しいユキヒヨウがいた。

コバルトブルーの瞳。

純白なもふもふの毛。

ピンクの大きな肉球。

真っ白な銀世界に現れる、神秘的で美しいものを全て集めたような容姿だ。

「お前が心配でここにきたのだ。お前が失神してどうする」

とても澄んだ、綺麗な声でおじいさんに優しく語りかける。

おじいさんはゆっくりと目を開く。ユキヒヨウの姿に圧倒され、目がユキヒヨウのコバルトブルーの瞳に釘付けになる。

「お前最近何も食べていないだろう。家族がいなくて自分が誰かわからなくて寂しい、とのことだと聞いたが、本当のようだな」

そう言っユキヒヨウはおじいさんの椅子に左の前足をかけ、後ろ足で立ち上がる。そして、空いた右の前足でおじいさんの背中をさする。

「お前は山の精霊たちによつてここにきた。お前がここにくる前、度々街の人々に災難が降りかかるにも関わらず、彼らは病気や怪我を治す知識がなく、人口がどんどん減少していった。私たちは精霊だが、自然を感謝してくれているこの街の人々を守りたいと考えている。だからどんどん倒れていく僕い彼らを助けてやりたかった」
ユキヒヨウはおじいさんの心臓からおじいさんの顔に視線を移す。

「お前は魔法使いだ。だから薬を扱う知識もあり、人間とも関わり合える立場だった。精霊たちはお前をここに寄せれば街の人々を助けることができる、と考えた。そこで私たちはお前を魔法使いの村から引っ張り出してこへ連れてきた。いろいろなところへ旅立って、自分の任務をこなす他の魔法使いたちと違って、お前はいつも家にこもっていろいろな薬を作っていたようだったから」

ユキヒヨウは部屋の中を見渡す。

「お前の記憶を消した理由も同じだ。私たち精霊は、お前の記憶を消さずにこの山へ送ったら、きっとお前は嫌がって、この街の人々を助けられないだろう、と」

ユキヒヨウはそう言い、雫が乗っている生き生きとした植物が綺麗に並べられている戸棚を見る。

「だがもう心配はなさそつだ」

ユキヒヨウは前足を床につける。そして何もない空気から青い物体を取り出し、おじいさんに握らせる。

「これをここに置いていく。私の大切なガラスだ」

雫の形をしたガラス。上のアイスブルーが、下に行くたびに溜まってコバルトブルーに近づく。

まさに小さな氷の洞窟^{どうくつ}、スーパースーパーブルーだ。

「これを見ていると辛い気持ちガスツと吸い込まれて辛くなるだろう？」

その通りだった。おじいさんはその綺麗なガラスを見た途端、辛かった気持ちが全てガラスに吸収され、辛くなくなっていた。

ユキヒヨウは雪のように真っ白な尻尾^{しっぽ}を左右に動かして言う。

「こつこつ吹雪で街のみんなと会えなくなる日はまたあるかもしれない。その時のためにこれを置いていく」

おじいさんはガラスのなめらかな輪郭^{りんかく}を手でなぞるようにして触る。一見冷たそうなガラスだが、冷たくない。とはいっても暖かくもない。本当に不思議な感覚だ。

おじいさんの淡い青色の瞳がユキヒヨウの深い青色の瞳を見つめる。

ユキヒヨウはじーっとおじいさんの目を見返して言う。

「先程言った通り、お前には大事な任務^{まこと}がある。それを全うしろ」

ユキヒヨウはそう言い残し、おじいさんに背を向けた。

柔らかい甘い香りが宙を舞う。

美しい歌がゆつくりと流れる。

薄紅色の空気がおじいさんを柔らかく包み込む。

おじいさんはユキヒヨウを見つめる。

おじいさんの視線に気付いたのか、ユキヒヨウは振り返る。

「心配するな。街のみんなもお前の家族だが、私を含めた山の精霊たちも、世界各地にいる魔法使いたちも、全員お前の家族だ。お前はひとりぼっちじゃない」

そう言い残した後、ユキヒヨウは再び後ろを向き、跳ぶ。

白と青になった空気がユキヒヨウを囲み、そしてそのまま、香りと音楽と共に消える。

残された魔法使いは顔をしわくちやにして、嬉しそうに笑う。

選考委員コメント

『青い氷の結晶』

石野 晶

山の上に一人で住む魔法使いのおじいさんという設定や、柔らかな文章が童話らしい作品です。雪の中に思いが浮かび上がる場面の描写が詳細で、イメージがよく伝わってきました。吹雪に閉ざされた家で孤独に耐えきれなくなったおじいさんの前にユキヒヨウが現れ、おじいさんの役目を思い出させてくれます。ひとりぼっちではないと気づくラストに心が温まります。

夏井 敬雄

薬草づくりの魔法使いの物語です。魔法使いのおじいさんは、人々の幸せな思い出を閉じ込めた青い雪を見て、幸せに過ごしていました。しかし、街のみんなが嬉しそうにクリスマスを祝つことに、家族のいない自らの境遇に寂しさを感じ、孤立感を深めていきます。一体、自分は誰なのかと存在理由にも懷疑心を抱くようになります。食事をとらず、青い雪も見ず、ただボーッとするようになったおじいさん。生きる力をなくした魔法使いの前にユキヒヨウが現れます。物語の展開にもう少し工夫があればと思いました。冷たく透き通るような世界の描写は見事でした。

やえがしなおこ

山小屋で、街の人々のために薬を作っている魔法使いのおじいさん。吹雪の日々にふと寂しくなり、魔法で見る人々の笑顔が素直に喜べなくなった。どうして自分は一人ぼっちでここにいるのか……。主人公の心の隙間に、ふっと現れた揺れを静かに描いていることに好感を持った。思いがけない客人の登場によって、おじいさんの心に安らぎが戻る終わり方にもほっとさせられる。透明感ある色やイメージが、ガラス細工のよう美しい作品。

銀

賞

『キャンバスの中の貴方』

キャンバスの中の貴方^{あなた}

東京都 工学院大学附属高等学校二年 榊^{さかき} 間^ま 茜^{あか} 里^り

週に二回の体育の時間。それはクラスのグループ編成を残酷^{ざんぐく}に浮き彫^ぼりにする。

適当にチームをつくれという指示。適当^{あたう}というのだから、近くに居る誰かしらと組めば良いものを。わざわざ遠くへ出向いて、自らが所属するグループへと向かう。

版画^{はんが}みたいのに、ここは背景と混ぜられないから、ここに溝^{みぞ}を彫^ほる。ここは団体であるから際立^{きわだ}たせるために深く溝を作り、高低差を付ける。

そうではないと絵は完成しない。

そうではないとクラスは完成しない。

私は孤立^{こりつ}したパーツであり、周りに深く溝が彫られている。

別に好きで一人になってしまふのではない。

ただ、必然的にそうなるだけ。

初めは仲良くしようと愛想^{あいそ}良くした。私も周りと上手くやれていた。だが私のような気の弱い女は、私のことを知るや否^{いな}や次第に誰の目にも映らなくなっていくものなのだ。気配^{けはい}すらも潰^{つぶ}されて、惨^{みじ}めに消えていく。

バスケットボールが床を突いて、足や尻^{しり}に振動が伝わる。聞こえる荒い呼吸。干切^{ちぎ}れそうになるほどの歓声。

時折、誰かのシューズがきゅつと音を立てて耳が痛い。

体調不良という盾に隠れて見渡す景色は青春そのもので、風船みたいだ。

男女混合チームでのバスケの試合。女子が楽しそうに男子を囓り立てる。調子に乗った男子はスリーポイントシュートを打つ。チーム間わず互いにハイタッチ。

喋喋喃喃ちやうちやうなんなんとしていた観客も、立ち上がり歓声を上げている。

私には関係ないこと。

巨大な風船は膨らみ、押し潰されていく。

「ねえ、君も見学？」

頭の上からハスキーな声がして、驚いて頭上を見上げた。

高校生活一回目の初夏。大量の人の熱気に包まれた体育館。端っこで壁に背を向け、体育座りをして小さくなった私を見つけたのは奇跡だ。

赤系のアイシャドウで囲った切れ目。すっとした鼻の下には、内側から滲んだような血色感のある唇が付いている。

「うん、そうだよ」

「ふうん。じゃ、隣失礼」

華奢な背中を丸めて胡座で座ってしまった。

ふっと私の口角が水平になるのを感じる。

生憎あいにく持っていた愛嬌あいぎょうが裏目に出た。

話しかけられたら反射で笑ってしまう癖くせ。

彼は学年で有名な男だ。

入学式、薄つきリップをつけるのはまだ分かる。だが、最近は過度なフルメイクで登校するようになった。

メイク禁止の学校では異色な存在。

真っ白の中に赤いデキモノ。

共に居れば同類として腫れ物扱いされる。

「絵、好きなの？」

ドキッとした。何故なぜ、知っているのだろう。

背中に生ぬるい汗が吹き出す。

「ほら、プリントの右端。先生の絵が描いてある」

彼の視線の先を追うと、仁王におう立ちする先生がプリントの中で微笑ほほえんでいる。

かっ顔に熱が集まっていくのを感じる。

昔から絵を描くのが好きだった。

皆は友情を両手に抱えていて、一方で私は大量のスケッチブックを抱えていた。

高校生になってからは絵というものを消していたはずだった。

絵は地味で暗い印象。正直、人間関係を取り持つ中で一番の重荷^{おもに}。だから隠していたつもりだが。風船に押し潰されないよう、スケッチブックで壁を作っていたのかもしれない。

「へえ、上手いね」

手を床に付いてぐつと顔をプリントに乗り出してくる。

あまりの近さに息が止まった。スケッチブックの山を壊され、崩れ落ちていく音が聞こえる。自分のプライバシーに踏み込まれていく感覚。眩暈^{めまい}がする。

湯に沈められた気分できると、彼はにっと唇を横に伸ばして笑う。切れ目はアーチ状に細くなる。

「今日の放課後、美術室来ない？」

私はどうかしていると思う。

何故、美術室の前に来てしまったのか。

湿気^{こも}が籠^{こも}って蒸し暑い。立っているだけでしっとりと汗をかく。下ろした髪の毛が首に張り付いてきて気持ち悪い。

美術室の隣にある窓の前に水道がある。蛇口^{じゃくち}から出る水滴^{すい}が日差しで光る。床には青色の水で出来た斑点模様^{はんでんもよう}ができている。この斑点で足を滑らせて頭を打ってしまいたい。そしたら奇跡的に彼のことを忘れてしまって、何事も無かったように帰れるのに。

なんとなく、私は彼が気になってしまったのだ。

「あれ？ 体育の時の？」

背後から声が聞こえる。振り向くと、絵の具で汚れた麻のシオルダーバッグとキャンバスを抱えている彼がいる。

「美術室の前は暑いだろう。入りなよ」

促されるまま入ると、冷気が足元から体を冷やしてくれる。まだ掃除をしていないらしく歩きたびに、木屑と埃の雪に足跡ができる。

冷たい空気とツンとした油絵具の匂いが漂っていて、汗ばんだ肌に染み込んでいく。

エアコンの効きが良いのだと言うと彼はキャンバスを不揃いに並んだ窓際のスタンドに立てかける。

一瞬で引き寄せられてしまった。

忘我した目が振り返りこちらを覗いている。

熱くて、火傷してしまいそうな強さ。

真っ赤な唇は半開きになっている。黒い艶のある髪はとても長く、肩の所で止まってそのまま足元へと流れ落ちていく。血のように赤い着物には、緻密な白いアザミの花が咲いていて美しい。

なんだろう。この絵は。

心をぐちゃぐちゃにされる。

心臓を素手で直接触れられ、揉みくちやにされる。全身に変な血が巡って苦しくなる。

「その絵、良いだろう？」

いつの間にか油絵具の準備を済ませた彼が言う。

「俺の傑作」

□角を大きく持ち上げ、にっと笑う。

その顔がキャンバスの女性と重なる。

彼と全く似ていないのに。

彼がキャンバスの中にいる。

肌の表面に悪寒が走る。

「それは俺の脳内の彼女」

つまり、妄想の女性。だが、キャンバスの中で、呼吸をして生きている。

見惚れる私を横目に彼は新しいキャンバスをその隣に置く。

傷だらけの鉛筆を握り、横向きに立て私の方へ向ける。

「次は実在する人を描きたい。君で良い？」

そう言うのと片目を瞑り、親指の爪で鉛筆に印を付け、私の身体を測り出す。

その場で固まる。被写体を見つめる目。

私を苦しいくらいに掴んで離さない。

彼の瞼に塗られた、フェミニンなアイシャドウの大きめのラメが光る。

冬みたいな空調の中、夕陽^{ゆうひ}で肌が焼けるように痛い。
私は彼という名のUVレジンで固められてしまった。

「奏^{そう}！ 筆は洗えと言ったでしょう？」

「洗えと言われたら嫌になるのです」

「は？」

「ごめん、ごめんと言い、彼はパレットを雑巾^{ぞうきん}で雑に拭^ふいている。反省の色など何もない。溜息^{ためいき}が出る。

高校に上がってから二回目の春。柔らかな昼の日差しが肌を温める。水道の前にある窓からは、桜の花びらがちらちらと降る街が見える。

放課後、美術室へ向かおうとした。

だが、準備室の棚にぶつかった拍子^{ひょうし}に絵の具が固まって凶器と化した大量の筆が、頭に落ちてきた。さらには赤い絵の具が山になっているパレットが私の頭に直撃^{ちよくげき}した。

くらくらする頭を押さえ、教室に戻り、爆睡^{ばくすい}している元凶犯^{げんきやう}を叩き起こして手伝わせ、現在に至る。

「夏海^{なつみ}は几帳^{きちょう}面^{めん}だね。俺は使う時に洗う」

「筆が痛むよ」

「気が向いた時に好きな絵を描いて、好きな時に筆を洗うのだ。それが俺のモットーだ」

「それを後回しの言い訳って言うのだよ」

またしても溜息が出る。なぜこの男に惚れ込んだのだろうとつくづく思う。

去年の夏の日。

あの日以来、私は彼が待つ美術室へ通うようになった。彼との時間が妙に心地良かったのだ。クラスメイト達の強くて太い大河のような会話とは違う。湧き水みたいな断片的な会話。だとしても彼のフレンドリーな人柄であつという間に打ち解けてしまった。

ここまで来るともう戻れない。

周りに低評価されようと何も気にならない。彼の魅力に堕ちていく感覚。悪くはない。

「そついでだよ」

彼がパレットを拭く手を止める。

「夏海は、何で風景画を描くの？」

筆を洗う手が止まる。

「初めて会った時、人物画が好きなのかなって思った」

心臓が飛び跳ねる。

確かに、私は人物画が好きだ。

誰かの世界に飛び込んでしまえば、現実が何も見えなくなっていく。自分が存在しているのか分からなくなる

ほどに吸い込まれる。引力は私を潰すのではなく、彼らの世界に入れてくれる。

時折心配になって、服の素材の感触に意識を向ける。布を感じるたびに、自分の体は存在しているとやっと認識することができるのだ。

「夏海の人物画、凄くなって思った。壮大な旅をしている感じ」

そう言うと言元のパレットに視線を落とす。もう乾き切ったパレットを雑巾で丁寧に拭いていく。

「俺、もっと夏海の人物画が見たくて美術室に誘った。何で風景画ばかり描くの？」

人目に晒されたら、潰されてしまつかもしれないから。

芯の通った人が描けば、白ずとぶれない絵になる。柔らかい雰囲気の人が描けば、ほんわかした絵になる。

もし、私が人物画を描くとしたらどうなるだろう。風に飛ばされて、見ず知らずの他人に潰されてしまふと思う。事実、あの体育教師の絵もそうだった。仁王立ちする彼女はどこか頼りなく、すぐにミンチにされそうな感じ。好きなものを踏まれるよりも、好きでもないものを踏まれた方がいい。

「俺はお前の人物画が好き。だから、今度見せてよ」

オレンジブラウンのアイシャドウで囲まれた目の目尻が下がる。相変わらず、にっと笑う唇。今日は彼が我慢の、温かみのある春の新色リップだそうだ。

彼は足元の棚にパレットをしまう。下を向いたと同時に見える、無防備な首。跡が残るほどに強く噛んでやりたい。顔を歪めて痛がる彼を見たい。触れたいけれど、触れてはならない。もどかさから気を紛らわそうと、水道を捻る。無色透明な水が筆についた絵の具でシンクに紅色の川ができた。

あの日から一体どのくらいの日が経ったのだろう。

散々鳴いていた蝉は地を這い、知らず知らずのうちに死んでいる。天気が不安定な日、空気は水を吸って冷たくて重い。冷房の代わりに、秋の冷たい空気が美術室を満たしている。もう、絵の具の匂いなどしない美術室。筆はふさふさなままだし、パレットには何も付いていない。ただ、平然とあるべき場所に立ち並ぶ。

奏は死んだ。

おもちゃが電池を切らしたように途絶えた。

夏休み明けの日、彼の机には一輪のたんぽぽみたいな菊が咲いていた。涙ぐみながら話す担任。もらい泣きする女子と俯く男子。

背中をさすってやりたりして励まし合うクラスメイト。

一体彼らは奏の何なのだろう。

担任は彼に対して好意的だった。

でも、クラスメイトは一方的に避けていた。異質な存在、関わりたくない存在として。

今はただのクラスの一体感を強める為の道具でしかない。小さな私はやるせなさに首を絞められる。縊るよう
にぎゅっとスカートを握った。

数日間学校には行けず、家に引きこもっていた私は今、放課後の美術室にいる。

空に灰色の雲が猛スピードで走っている。

私は真っ白なキャンバスを前にしている。

本当は絵など描けたものじゃない。

でも、描きたい。

四六時中泣いたせいで、外の雲みたいな灰色の霧が心の中で渦巻いている。目を瞑ると、じんわりと涙が沁みていく。そして、彼が描いた私の絵がじわりと浮き上がってくる。

彼が亡くなった翌日、彼の母親が彼の遺品を持ってきた。重たいキャンバスだった。

あの日の、絵。

奏と出会った日、美術室で描いた最初で最後の私の絵。彼は見せたくないと言い、自宅へ持ち帰ってしまった絵。こんな形で再会すると思わなかった。

キャンバスに浮かぶ私は何とも言えない表情をしている。悲しいような嬉しいような。

彼の前でこんな顔をしていたのだろうか。

ミディアムヘアの猫毛がふわふわしていて落ち着がない。だが、弱々しい垂れ目は一点に奏を見つめている。

キャンバスには私が居るのに、彼が居る。

殻ごと彼色に染まって、私は彼に喰われている。にっと笑う彼が居る。

今頃気づいた。

初めて美術室に入った時から、私は丸ごと彼に喰われ、飲み込まれていたのだ。

一瞬にして私は彼のものとなっていたのだ。

震える手を押さえ付けて、尖った鉛筆を握る。大丈夫。私の中には奏がいる。

輪郭を描いて、鼻を描き、目と口を描く。

濃く、赤系メイクを強調させる。キラキラと光る大きなラメには、あえて布の白を残す。

彼がメイクをしていたのは、ただのおしゃれではない。

彼の死後、日に日に悪くなっていく顔色を隠すためだと担任は打ち明けた。メイクの許可を貰い、先生達は目を瞑っていたそうだ。

段々と濃くなっていったのは想定外で、注意はしたがとても嫌がったらしい。

少しの隈も、少しでも紫になった唇を晒したくなかったのだ。

好きな時に、好きなことをしたい。そう言っていたのを思い出す。だから道具も洗わなかったし、無許可で突然私の絵を描いた。

病気だから、寝ていなさい。病気だから、早く帰いなさい。病気である事を理由に、自分の行動を制限されたくなかったのだろう。

彼の白くて細い首を描く。

色は一期一会なのだ。二度と同じ色は作れない。せつかくなら毎回史上最高の色を作りたい。パレットを前にすると彼は決まって顔を前のめりにして、パレットに顔を近づける癖があった。そのせいで首が痛いと言いつつ首を回しながら笑っていた。集中力を切り、楽しそうに私の方を向く。

その時の笑顔が、好きだった。

鉛筆が彼の華奢な肩を滑る。

絵を描いている時、彼は呼びかけても絶対に気づかない。口を半開きにして、我を忘れた顔。だから、肩を掴んで呼ぶ。

彼の肩は薄いけれど、頼り甲斐がある。シャツを通り抜け、彼の熱い体温が手のひらからじんわりと私の中で広がっていく。手のひらから身体の間を伝わる体温が好きだった。

あの熱こそが彼の原動力。好きなものにとことん邁進する熱。

彼の熱は、誰にも潰すことはできない。

あの赤い着物を着た女性は奏そのものだっただ。

どうしよう。

次々と彼の事を思い出す。

想いのコップはどんどん溢れて、両手でも受け止めきれなくなっている。思い出という名の重石がコップの中に次々と入ってきて体積が増し、さらに溢れる。

どうしようもなくて、でも、どうしようもなく幸せで、痛くて、涙が止まらない。

心の淵がジリジリと焼けていく。焼けて灰になってしまう。

灰を彼に向けて吹きかけてやりたい。

きっと彼は咽せるだろう。

それでいい。彼の身体に入ってしまうのならば。

キャンバスでにと笑う彼が、真つ暗な美術室にいる。
紛れもない、初めて会った日の奏。
でも、その中には私が佇^{たず}んでいる。
奏と一緒になら、何も怖くない。

震えていた手は、冷静を取り戻している。

だが頬^{ほお}は熱くて火照^{ほて}っている。視界はぼやけていて、窓から見える街灯りでキラキラとしている。
涙が重くなって下を向いた。私が描いた風景画はいつの間にか全て足元に落ちていて、一つ、二つ涙の染みが
出来る。

完成した絵を、そつと灰色の窓際のスタンドに立てる。

するとツンと絵の具の匂いが、風と共に私の前をよぎった気がした。

選考委員コメント

『キャンバスの中の貴方』

石野

晶

文章の端々から文学的センスがほとばしるのを感じるような、独自の表現力を持った作品です。カテゴリとしては純文学小説になると思います。愛する人の死というストーリーは恋愛小説の定番で、書き方を間違えると陳腐にもなり得ますが、惹きつける文章で最後まで書ききっています。彼が化粧をしている理由の意外さもよかったです。

夏井

敬雄

奏と夏海。周囲に馴染めず孤立する夏美に声をかけてきたのはフルメイクの男、奏。二人は冷たい空気とツンとした油絵具の匂う美術室で、「湧き水みたいな断片的な会話」を続けながらお互いに深く惹かれていく。夏美を描く奏。奏を描く夏美。キャンバスに描かれるお互いの人物画の描写を通して、二人の繊細で深い情愛が見事に表現されています。物語の構成も巧みで、作者の筆力に圧倒されてしまいました。

やえがしなおこ

クラスの中で孤立した存在である主人公が、学内ではやはり特異と思われる男子生徒、奏と出会い、絵を通してお互いを見つめ合う。主人公の研ぎ澄まされた心の描写には、緊迫感があって引き込まれる。彼を失った後、「私の中には奏がいる」と、彼の肖像を描き始める場面は圧巻。よどみない文章の中に、鋭い感性を感じさせる作品。

銀

賞

『雨夜の星』

雨夜の星

高知県 県立山田高等学校一年 谷

まゆみ

お天道様^{てんとうさま}がゆつくりと、それはもう気の遠くなるようにゆるりと山々のすきまからお顔をのぞかせた頃です。朝一番の柔らかい風^{かぜ}が彼岸花^{ひがばな}のそばを駆け抜ける、そんな場所に燕^{つばめ}が一羽とまっていました。

それは思わず息^{いき}を呑むほど、美しい燕でした。朝日が翼^{つばさ}に溶け込んで雫^{しずく}のようにきらきらと輝き、すらりとした体からは堂々たる威厳^{いげん}があふれていました。燕はやや盛り^{さか}りを過ぎたとはいえ、気高^{けだか}き戦士^{せんし}でした。小賢^{こざか}しい烏どもを振り切^きって仲間を守り抜いたことも一度や二度ではありません。唯一^{ゆい}欠点^{けってん}があるとすれば、右の尾羽^{おばね}でした。そこは何かに引き千切^{ちぎ}られたかのように失われていました。周りの燕たちはその傷に胸を痛め、親しみを込めて『欠け羽さま』と呼んでいました。

欠け羽は近くの山からその下にある人里までをねぐらにしていましたから、通りかかる燕たちからたくさんのお話を聞いていました。ある時は子が親からはぐれたことを聞き、ある時は強く吹いた風で木々が倒れてしまったことを聞きました。そのたびに欠け羽はそこへ駆けつけましたから、ますます燕たちは欠け羽を頼るようになったのです。そして今日もたくさん燕たちが欠け羽のところを訪れました。

「欠け羽さま、人里では近^きごろ雨が降らなくて、草花^{くさな}だけでなく水まで枯れはじめています」
大変よねえ、と心配そうに、西^{しやう}の商家^けに巣をもつ奥さんが言いました。

「人間の育てているものも枯れてしまっていたわよ」

「水源の方の水はなくなっているのかしら」

「もうずいぶんと少なくなっているそうよ」

その話を聞きつけて、そばを通りかかった燕たちも口々に語りました。

欠け羽はそのことを心配に思いました。けれど、雨のことはどうしようもありません。燕たちもそれが分かっているのか、不安を語り終えると次々と食事に向かつていきました。

——そういえば、近ごろは雨が降っていなかった。

思い返して初めて、欠け羽はそのことに気づきました。晴れている方が好きな欠け羽でしたから、しばらく雨が降っていなかったことに、今まで気がつかなかったのです。

欠け羽はふと空を見上げました。薄い雲が風にたなびいて、まぶしいほどに青く光り輝いているこの空は、欠け羽の心をふつと軽くしました。そうして、しばらく眺めてみると、ふと生まれた場所に帰ってみようという思いがうかんできました。欠け羽の生まれた場所はここからさほど遠いわけではありません。欠け羽はつと前方の山を見ずえると、大きく羽ばたきました。胸は期待にふくらみ、耳奥でどうつどうと血の流れる音がします。山を越え、谷を越え、もう一山越え。どこまでも広がる盆地に暮らす人々の、屋根も頭も越えたその先の森の中。そこに、欠け羽の故郷がありました。そこまで来て、欠け羽は急に逃げ出したいような気持ちになりました。突然、昔のことが思い出されて、石でも飲み込んだかのように胸が苦しくなりました。欠け羽はふらふらと旋回し、来た道に戻るよりほかありませんでした。

夜、ねぐらへ戻ってきた欠け羽は物思いにふけていました。故郷の景色は燕に家族のことを鮮明に思い出さ

せたのです。

欠け羽は長く長く息を吐いて、夢が自分を包み込むまで、じっとしていました。

「りん姉さま、まだ声を上げてはいけないの」

私は微かな声を出して、右横にいる姉に問いかけました。

「ええ、むらさき。母さまか、父さまが帰ってくるまではね」

姉は私よりも、もっと声を落として言いました。私は首を傾げて考えました。

——私、ずっと前から父さまを見ていない。次は父さまが帰ってきてくださればいいのに。

けれど、次もまたその次も、ご馳走をくれたのは母さまでした。

「りん姉さま。父さまは、どこにいらっしゃるの」

「私にもわからないわ」

そんな話をしていた時でした。夕日に紛れて、黒く大きな影が巢に舞い込んできたのです。兄たちはその影を母だと思ったのでしょうか。一斉に声を上げて、影を巢に招き入れました。けれど、姉は私を巢の隅に押さえつけて一言も発しようとしませんでした。

兄の悲鳴が姉の翼越しに聞こえました。私は目を大きく見開いて、周りがどうなっているのかを見ようとしましたが、翼の裏に包まれていては、どうやっても見ることは叶いません。姉は、尚も私が身動きできないように覆いかぶさっていました。それから、時折、兄の悲鳴や何かが落ちる音が響きました。随分経つと、影のたてる足音が私達の方へ近づいてきました。姉は体を強張らせ、胸がどくどくと大きく振動していました。影は

姉の翼を鋭く切り裂きました。姉の声にならない音が振動として伝わりました。影は右の翼を狙ったようで、私の左の胸あたりにじんわりと暖かいものが染み込んできます。姉が私を渡すまいと、一層強く包み込んだときです。影がぎゃあつと言いながら、巣から飛び去っていききました。私が姉の翼から顔を出すと、そこには人の子がいました。顔がひよこつと見え隠れしていて、手には布のようなものを握っていました。私はまだ恐怖で固まっているくちばしを開こうとしましたが、影を追いついた人の子はすぐに姿を消してしまいました。

それから、数日が過ぎました。

「りん姉さま、翼が痛むのですか」

「ええ。けれどすぐに良くなるわ」

姉は飛ぶまでにたくさん時間が必要でした。それは、影につけられた傷が原因であることは確かでした。けれども、ついに姉は飛ぶことに成功したのです。一緒に空を自由に舞い、遊びに本気を出す日々はとても楽しいものでした。その遊びが競争に変わるのには自然なことでした。毎日のように様々な競争をしました。森をくぐり抜け、小川を渡り、食べ物を取りながら、おいかけっこをたくさんしました。幾度も競争は行われましたが、いつも姉より先に勝利をつかんだのは私でした。だからといって、私達の関係が悪くなることはありませんでした。姉は私と遊べることのほうが勝敗よりも大事だと本気で思っている様子でしたし、私も勝ったことを鼻にかけるほど自惚れてはいませんでした。

その日、姉と私は日当たりの良い野原で日向ぼっこをしていました。傍には、青紫色の花をつけた竜胆が咲いていました。

「むらさき、燕が死ぬまでにやらなければならないことを知っていますっ」

姉は空を見つめながら、独り言のように呟つぶやきました。

「……燕はね、私たちと神様を繋つながなければならぬのよ」

「私たち……」

「そつ、みんなよ。動物も人間も草花も、みんな。どちらかが困こつていれば、私たちが橋となつて神様と動物たちをつなぐのだと思おもつわ」

私はちよつと首を傾かげて言いました。

「でも、私は神様なんて見たことありません」

姉は可笑おかしそつに私を見ました。

「きつと、見える日ひが来るはずよ。私にも、むらさきにも」

ふわりと微笑んだ姉は、その場で羽を動かすと、いたずらっぽい光を目に宿すしました。

「今日は宝探たづしをしましょう」

姉は歌うように私を誘いいました。私は嬉うれしくなつて、自分の羽を姉さまに擦こすりつけました。姉は夕暮れに巢すに集合しようと言いつと、里の方へ飛んでいきました。私も慌あわてて、追いかけるように飛び立ち、里へと急ぎました。夕暮れ、私達の足元に転がった宝は三十三個でした。私が十六個、姉が十七個でした。私にとつて初めての敗北でした。姉の瞳には嬉うれしさとしりぞけないような気持ちが滲にじんでいました。胸にじわりと広ひろがった、なんとも言えぬ気持ちを押し込め、私は姉に勝利の座を譲ゆづりました。

夜になり、虫の声が聞こえる頃には、姉の寝息が聞こえてきました。けれど、私はどうしてか眠りにつくことができませんでした。胸の奥に泥どろがぬめりと溜ためまっているようでした。

—置いていかれる

刹那、胸を突いて出たのはそんな感情でした。

—優しいのも賢いのも全部、姉さまの方。飛ぶことで負けてしまえば、こんな私には何が残るの
溢れ出る感情を止めることはできませんでした。堰を切ったように流れ出る暗い感情は留まることを知らな
かったからです。そうして幾ばくか過ぎた時、私は自覚しました。

—私、姉さまが劣っていることに安心していたの

ひどく醜い考えでした。姉に傷さえなければ、こんな思い上がった考えをすることもなかったのだという言い
訳が浮かびました。

—醜い、醜い。嫌い、全部消えてなくなればいいのに

衝動的に右の尾羽を引きちぎりました。それしか、自分を痛めつける方法が知らなかったからです。

—こんな自分なんて壊れてしまえばいいのに

私は、隣にあった暖かなぬくもりを振り切るようにして、早朝の闇をがむしやらに飛びました。姉にこんな自
分を見せたくなって、私はそのまま逃げるように遠くの、遠くの地へと、飛び去ったのでした。

欠け羽は薄暗い時間に目を覚ましました。夢を見ている間にあふれた涙は胸をぬらし、体の力は抜けきって、
隣の幹に倒れ込んでいました。その時、ぼつりと頭の上を濡らすものがありました。雨です。小さな雲が空から
落ちてきて、地面に染み込んでいきました。欠け羽が泣き止むまでのひとときの雨でした。けれども、雨は欠け
羽の心に積もったままだった泥を少しずつ洗い流してくれるようでした。

日が昇り、地面は陽の光を受けてすっかり乾いていました。欠け羽は、やはり生まれた場所に帰ろうと思いましたが、その気持ち崩れてしまわないうちに戻らなければ、もう二度と勇気をふりしげれない気がしたからです。自分を鼓舞するように翼をひと振りすると、空へと羽ばたきました。山を越え、谷を越え、もう一山越えしました。そんな時、ふいに視界の端に一人の人間が映りました。目を凝らすと、その少年は木の根本にうずくまっていた。欠け羽は何やら引き寄せられるようにして、木の枝におりたちました。少年は枝のゆれる音に肩をふるわせ、こちらを仰ぎ見ました。そして、目を見開くと、にこりと笑って言いました。

「おかえりなさい、燕さん」

それは、幼い欠け羽と姉を救ってくれた人の子でした。欠け羽は思わぬ再会にくちばしを閉じたり開いたりしながら木の枝にしがみついています。

「これも何かのご縁でしょうから、どうぞ上がっていただくかい」

少年は木立に隠れる小屋を指さすと、立ち上がって歩いていきました。欠け羽は少年の向かう先が自分の生まれた場所であることに気がつきましたが、昨日飛んできたときほどには苦しくありませんでした。欠け羽は目の前を歩く少年が闇を照らしながら歩いてくれるように感じました。

「去年まで貴方のお姉さまの鈴さんがいらしていたのですが」

少年は悲しそうな顔をして、縁側に腰掛けました。

「夏の末に、もうここへは来られないから、と」

欠け羽は、息もできないほどに驚き、慌てて少年に問いかけました。

「姉さまは今どこにいらっしゃるのですか」

「僕も知らないのです。突然いなくなっていましたから」

少年はうつむいて黙っていました。突然思いついたかのように、ぱつと欠け羽の方を見ると、小屋の中に走り去っていきました。そして、少しするとはたと小気味良い足音をさせながら、欠け羽に何かを差し出しました。

「燕さん、これをどうぞ」

少年は一片の羽を置きました。それは間違いない姉の羽でした。欠け羽は、青藍色に輝く羽を自分と姉の他に見たことはありませんでした。

「大事にしていたものですが、燕さんが来てくださったので、お返しすることができます。僕ではもう、持つていくこともできませんから」

少年がどうしてそんなに悲しげに微笑んでいるのかわからず、不思議そうに首をかしげる欠け羽を見て、少年は少し可笑しそうに笑いました。

「僕は明日の朝、水神さまに捧げられるのです。……最近、雨が降っていないかったでしょう。里の方では作物が枯れはじめているそうで、贄をだすことにしたいのです」

欠け羽は少年にかける言葉を見つけることができませんでした。少年はふわりと微笑むと言いました。

「明日の夜明けに里の人たちが迎えに来てくれるそうです。でも、今日の夜、僕とお話してくれる友達がいなのです。ですから、燕さん。今日、泊まっていきませんか」

少年はだんだんと照れくさそうに、頬を赤らめました。欠け羽はそんな少年を力いっぱい抱きしめたいような気持ちになりましたが、その代わりに大きくうなずいて、私で良ければ、と笑いました。

欠け羽と少年はお月さまが空高くのぼるまで話しつつづけました。ともに歌い、悲しみ、笑いました。楽しい夜でした。欠け羽はいつの間にか眠っていました。

とんつ、とんつ、と、何かを叩く音がしました。欠け羽ははっと目を覚ましてあたりを見回しました。隣に寝ていたはずの少年の姿はなく、戸口が閉まる音が、からからと響きました。少年は水源に向かったのでしょうか。欠け羽は胸に冷たい風が吹き込んだかのように感じました。この家に来る前にはなかった寂しさが、欠け羽の体を満たしていました。欠け羽はどうしようもなくなつて、ぱたぱたと小さく羽ばたき、小屋のあちこちを飛び回りました。すると、隅に紙の束がぼつんと置かれていることに気がつきました。欠け羽は少年の跡をたどるようにその紙を開きました。

里の人が僕のところに来て、十日後に水神様に捧げる儀式をすと言ってきた。僕にはお父さまもお母さまもないから。生け贄だから、捧げられないといけない。

あと五日。本当は逃げ出したい。本当はもっと遠くのところに行つて、色んな景色を見てみたい。あと三日。鈴さんに会えたら良いのに。そうすれば、一人で寂しくなることなんてなかったのに。

今日、僕が捧げられる日。鈴さんの妹、燕さんに出会った。とっても楽しかった。こんな日々が続けばいいのに。そうすれば、燕さんずっと話していられるのに。生きていたい。

紙は濡れていたのか、ちぢれて文字が歪んでいました。欠け羽は少年の笑顔を思い出しました。そして、姉の言葉が欠け羽の頭を駆け抜けました。

——困っていれば、私たちが橋となって神様や動物たちをつなぐのよね、姉さま。

欠け羽は姉の羽を自分の欠けた尾羽に差し込むと、あらん限りの力を振り絞って、大きく羽ばたきました。
——どうか、間に合いますように。

欠け羽は翼がもげてしまいそうなほど必死に水源に向かって飛びました。飛んでいる時間がひどくゆっくりに、翼は鉛のように重く感じました。欠け羽は森が途切れ、大きな池が空に向かって大きく口を開けている場所へ吸い込まれていきました。そこには今まさに池へと身を投げようとする少年の姿がありました。欠け羽は翼を大きく広げると少年に体あたりしました。どうしても、少年を押し留めたいと思いました。

「生きたい、と願ったのでしょうー！」

欠け羽は叫びました。安堵^{あんど}と悲しみがぐちゃぐちゃになって、胸をぐるぐると駆けめぐり、欠け羽の目には涙があふれました。

欠け羽は少年の胸にしがみついて言いました。

「……生きていたいのでしょう？」

少年は驚いたような、泣きそうな顔で欠け羽を見つめました。

「生きて、いたいです」

少年は言葉をとぎれさせながらも、はつきりと言い切りました。欠け羽は少年をしっかりと見つめ、静かに少年に言いました。

「姉さまだったら言つと思つのです。困っている方がいれば、助けなければ、と」

欠け羽は、ばさりと羽ばたくと上空にまっすぐ舞い上がりました。そしてくると体を反転させると、暗く硬

い水面へ真つ逆さまに落下していききました。風が耳元でびゅうびゅうと鳴っています。そして次の瞬間に、音も景色もなにもかもが、一瞬で消えました。欠け羽は、どこまでも果てしなく澄む青の沈黙の中をたゆたいながら、一つの願いをとねえます。

——どうか、神さま。お救いください。雨を降らして、私の代わりにあの子を包み込んでください
欠け羽の目には、白藍色の鱗を輝かせる龍の姿がうつりました。

欠け羽は長い夢を見ました。青の中を駆け渡ってきた姉が、私の目の前に降り立ちます。優しく見つめる姉の、懐かしい葡萄色の瞳。欠け羽はむらさきに戻って問いかけました。

——りん姉さま、私はちゃんと成長できましたか？

——ええ、もちろん。貴女は私の自慢の妹よ

むらさきは泣きそうになるのを必死でこらえて、思いつきり笑いました。そして、悲しく辛く楽しかった毎日を語りはじめました。思い出は青の世界に溶け出して、どこまでも一緒に駆けていく姉妹の道を照らしました。



選考委員コメント

『雨夜の星』

石野

晶

表現力豊かな文章で、欠け羽のしている景色や心情がよく伝わってきます。姉に対して抱いた醜い感情から、衝動的に尾羽を抜いて故郷を飛び出した欠け羽が故郷に戻ると、自分達を助けてくれた少年が水神の生贄になろうとしていました。少年を生かそうと決意して身代わりとなった欠け羽の願いは、きっと神様に届いたのだでしょう。

夏井

敬雄

主人公のむらさきは姉から「ツバメは神様と動物たちをつなぐ役割を担う」ことを教えられていました。一方で、むらさきの心の奥には姉に対する優越感と劣等感との相克がありました。作者は、その感情の表出を見事に表現しています。「胸の奥に泥がぬめりと溜まっている」、「堰を切ったように流れ出る暗い感情」、そうした表現に、激しく自らを卑下するむらさきの姿が伝わってきます。心の葛藤を超えて、かくあるべしという精神の成長がポジティブに描かれている点で、賢治の『よだかの星』とは異なる魅力を持つ作品として優れていると思います。

やえがしなおこ

「欠け羽さま」と呼ばれる主人公の燕は、幼い日、優しさも理性も、何もかもが優っていた姉に嫉妬を抱き、その苦しみから逃れるために自らを傷つけた。弱さを原点到、生きる意味を追う主人公の姿に切実感を感じる。自らが犠牲となつて、人間の子どもの命を救う終わり方は悲しく美しい。夢の中で姉と再開する最後に限らない救いがある。

受賞作品

銅賞 作品一覧

☆「月よみ観測所」

菊 地 奏 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 3年

☆「世界でいちばんかっこいいライオン」

種 畑 帆 希 東京都 女子学院高等学校 1年

☆「あなたへ」

青 野 有 佳 石川県 金沢大学附属高等学校 3年

☆「くろいろひつじと涙の川」

河 合 ひなた 岐阜県 県立武義高等学校 2年

☆「海に溶ける」

小 野 真 央 京都府 花園高等学校 3年

☆「神様との夏祭り」

舌 間 心 晴 福岡県 県立筑紫丘高等学校 2年

☆「色々なものに変身」

岡 村 勇 翔 熊本県 必由館高等学校 2年

【学校賞】

該当なし

【奨励賞】

該当なし

ノミネート記念作品一覧

- ☆「ざしきわたし」
柳 田 幸 乃 岩手県 県立盛岡第一高等学校 3年
- ☆「砂手」
海 野 日 暖 埼玉県 県立大宮高等学校 1年
- ☆「あおと虎と猫」
高 野 和 埼玉県 県立坂戸高等学校 1年
- ☆「浮世は夢に見えて」
樫 本 苺 佳 千葉県 市川高等学校 1年
- ☆「好きなことできるや」
根 本 紗 華 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆「めざして」
廣 岡 香 東京都 創価高等学校 1年
- ☆「宝探し」
井 出 彩 乃 長野県 長野県小海高等学校 3年
- ☆「ニホンアシ」
大 洞 美 結 岐阜県 県立岐阜高等学校 3年
- ☆「二国物語」
源 嶋 葵 衣 岐阜県 帝京大学可児高等学校 1年
- ☆「月が喰われた日」
藤 井 彩 愛知県 県立愛知商業高等学校 2年
- ☆「勿忘草が枯れるまで」
川 上 耀 誉 愛知県 藤ノ花女子高等学校 3年
- ☆「隠し味に愛情を込めて」
齊 藤 朱 里 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆「Two Stories」
中 田 琴 音 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆「翡翠になったカワセミ」
樋 垣 志 穂 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆「ドンドン打ってけ！」
宮 本 遥 加 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆「届くよきっと」
生 田 菜々美 兵庫県 県立加古川東高等学校 2年
- ☆「私の勝ち」
山 口 和華那 兵庫県 神戸星城高等学校 1年
- ☆「白いユリの少女」
片 岡 恵 広島県 舟入高等学校 2年
- ☆「棗のそばの日向氷」
南 朱 莉 福岡県 県立筑紫丘高等学校 1年
- ☆「ふうりん ちりん」
東 山 成 実 熊本県 必由館高等学校 2年
- ☆「月が満ちるまで」
島 袋 光 平 沖縄県 県立コザ高等学校 2年

第1回 受賞作品

- ☆金の星賞 「干潟^{ひがた}の夜に」
方 丈 真菜美 千葉県 県立千葉高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「ミドリノコエ」
池 宮 奈々子 沖縄県 県立那覇西高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「ちびときつねとおばあちゃんと」
昆 ちひろ 岩手県 県立不来方高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「水音^{すいお}の虹」
山 崎 美 穂 東京都 豊岡女子学園高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お日さまと白い花」
阿 部 暁 子 岩手県 県立花巻北高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お茶とオニギリ」
佐 藤 香 織 群馬県 県立高崎商業高等学校 2年
- ☆銅 賞 「音の子うら」
波 場 友美子 神奈川県 鎌倉女学院高等学校 1年
- ☆銅 賞 「その心、忘れないでください」
生 瀬 千紗子 神奈川県 鎌倉女学院高等学校 1年
- ☆銅 賞 「夜」
伊 藤 香 奈 岐阜県 県立各務原西高等学校 3年
- ☆銅 賞 「お星様をさがしに」
加 藤 直 樹 愛知県 南山高等学校 3年
- ☆銅 賞 「伝 統」
五百森 裕 子 香川県 県立飯山高等学校 3年
- ☆銅 賞 「お空にのぼったクモ」
坂 中 彩 長崎県 向陽高等学校 3年

第2回 受賞作品

- ☆金の星賞 「夢の羽～僕たちの約束～」
藤 原 欽 子 岡山県 県立津山高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「夏色の奇跡」
岡 部 綾 子 東京都 都立戸山高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「真夜中の冒険」
平 沢 美 佳 茨城県 県立水戸第三高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「ノラ爺のきらきらぼし」
橘 加奈子 岩手県 県立盛岡第二高等学校 3年
- ☆銅 賞 「からっぽの郵便箱」
吉 田 千 明 北海道 旭川藤女子高等学校 3年
- ☆銅 賞 「ねずみの勇気」
小 野 雅 子 山形県 県立新庄南高等学校 3年
- ☆銅 賞 「月の下の晩餐会」
菊 池 優 香 千葉県 県立松戸高等学校 3年
- ☆銅 賞 「座敷わらし」
志 村 美 保 東京都 京華商業高等学校 3年
- ☆銅 賞 「陽のあたる丘」
金 行 めぐみ 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「コスモスのうた」
森 田 佳代子 富山県 県立井波高等学校 3年
- ☆銅 賞 「ナツの思い出」
伊 賀 みなみ 兵庫県 小林聖心女子高等学校 2年
- ☆銅 賞 「旅人」
池 村 怜 也 沖縄県 県立宮古農林高等学校 3年

第3回 受賞作品

☆金の星賞	「Comfortable Doll」	山本 晴佳	栃木県	作新学院高等学校 1年
☆銀の星賞	「ないしょないしょの星祭り」	島 貫 春 菜	山形県	県立山形西高等学校 1年
☆銀の星賞	「ジイちゃんは僕のヒーローで」	小 林 奈々絵	北海道	根室高等学校 1年
☆銀の星賞	「月の夜」	菅 野 澄 子	東京都	恵泉女子学園高等学校 3年
☆銅 賞	「おみつ」	富 樫 雅 章	山形県	県立置賜農業高等学校 3年
☆銅 賞	「おばけ屋敷で見たものは」	木 本 奈 緒	茨城県	県立土浦第二高等学校 1年
☆銅 賞	「風の唄」	小 川 萌	東京都	お茶の水女子大学附属高等学校 1年
☆銅 賞	「夏の約束」	服 部 真 季	東京都	お茶の水女子大学附属高等学校 2年
☆銅 賞	「てのひらのそら」	神 崎 由依子	東京都	慶応義塾女子高等学校 2年
☆銅 賞	「夜空に浮かぶデュランタ」	峠 田 彩 香	愛知県	県立時習館高等学校 1年
☆銅 賞	「たからもの」	小 林 千 津	京都府	同志社女子高等学校 3年
☆銅 賞	「存在のあり方」	高 畑 明 弘	香川県	尽誠学園高等学校 2年

第4回 受賞作品

☆金の星賞	「カラーメーター」	岡 安 茉莉花	埼玉県	栄東高等学校 2年
☆銀の星賞	「ネコシャンブーのぼうけん」	矢 吹 優 衣	福島県	県立光南高等学校 2年
☆銀の星賞	「life times」	山 本 晴 佳	栃木県	作新学院高等学校 2年
☆銀の星賞	「RESET」	土 屋 絵 美	東京都	白百合学園高等学校 1年
☆銅 賞	「空色スケッチ」	石 川 朋	岩手県	県立水沢高等学校 2年
☆銅 賞	「サマー・セブン・デイズ」	岡 野 真 理	茨城県	県立竜ヶ崎第一高等学校 2年
☆銅 賞	「青いカバ」	菅 和 也	東京都	早稲田大学高等学院 3年
☆銅 賞	「フィードルの旅」	谷 田 雄 一	東京都	早稲田大学高等学院 3年
☆銅 賞	「しわとりばあさん」	森 脇 梓	京都府	府立北桑田高等学校 1年
☆銅 賞	「二人の世界～空に流れる歌～」	中 山 真 依	兵庫県	神戸海星女子学院高等学校 2年
☆銅 賞	「Wish」	瀬良垣 香	沖縄県	県立具志川高等学校 2年

第5回 受賞作品

☆金の星賞	「かっぱのはなし」	矢 吹 優 衣 福島県	県立光南高等学校 3年
☆銀の星賞	「お化け踏切と不思議な窓」	三 宮 海 里 北海道	立命館慶祥高等学校 3年
☆銀の星賞	「惑星観覧車」	大 野 真 季 栃木県	県立氏家高等学校 3年
☆銀の星賞	「家族になろう」	山 本 晴 佳 栃木県	作新学院高等学校 3年
☆銅 賞	「夏休み ヒカリのオト」	工 藤 千 明 岩手県	県立盛岡商業高等学校 2年
☆銅 賞	「歌、満ちる夜」	島 貴 春 菜 山形県	県立山形西高等学校 3年
☆銅 賞	「ピー玉にうつるココロ」	岡 野 真 理 茨城県	県立竜ヶ崎第一高等学校 3年
☆銅 賞	「透明人間」	畑 野 舞 子 東京都	お茶の水女子大学附属高等学校 2年
☆銅 賞	「ミリのそばにいるよ」	森 仁 美 徳島県	県立城南高等学校 3年
☆銅 賞	「双子の肖像」	筒 井 陽 香 山口県	梅光女学院高等学校 3年
☆銅 賞	「Hg～水銀の魅力～」	荒 瀬 菜穂子 福岡県	県立小倉商業高等学校 2年
☆銅 賞	「約束の旅」	松 本 貴 子 沖縄県	県立嘉手納高等学校 3年

第6回 受賞作品

☆銀の星賞	「かっぱのかあちゃん」	市 川 愛 東京都	白百合学園高等学校 2年
☆銀の星賞	「思い出の思い出は風の庭」	黒 田 佳 奈 香川県	県立三木高等学校 2年
☆銀の星賞	「憎しみのカラス」	横 田 仁 美 山口県	県立防府高等学校 3年
☆銀の星賞	「夕焼けの精」	河 原 奈 里 熊本県	県立熊本高等学校 2年
☆銅 賞	「 ^{しんわ} 森話」	阿 部 美智子 岩手県	県立盛岡第二高等学校 1年
☆銅 賞	「おじいさんの棺」	伊 藤 早 紀 埼玉県	県立大宮武蔵野高等学校 2年
☆銅 賞	「虹色の枠の窓」	柴 原 由 季 千葉県	県立柏南高等学校 1年
☆銅 賞	「僕が強くなる日は、」	井 上 澄 香 東京都	都立富士高等学校 1年
☆銅 賞	「黒板ビリー」	河 合 礼 子 神奈川県	市立横浜商業高等学校 2年
☆銅 賞	「風送る」	若 槻 理 恵 島根県	県立横田高等学校 3年
☆銅 賞	「悲しいアクマ」	古 賀 ちひろ 福岡県	中村学園女子高等学校 3年

第7回 受賞作品

- ☆金の星賞 「鏡に映る夢」
武 田 啓 太 山形県 県立新庄南高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「ミコの大切な大切なものは」
石 澤 咲 希 岩手県 県立福岡高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「僕と狐」
北 山 萌 夏 東京都 文化女子大学附属杉並高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「くすの木のうた」
柳 原 茉美佳 大阪府 大阪教育大学附属高等学校 2年
- ☆銅 賞 「空の旋律」
中 島 菜 月 群馬県 東京農業大学第二高等学校 2年
- ☆銅 賞 「子守桜」
清 水 真 裕 埼玉県 県立伊奈学園総合高等学校 3年
- ☆銅 賞 「星の降る夜」
山 口 祥 子 石川県 県立大聖寺高等学校 2年
- ☆銅 賞 「文字の旅」
田 村 菜 愛知県 滝高等学校 2年
- ☆銅 賞 「毎週月・金は星の日です」
高 山 愛 美 岐阜県 県立加茂高等学校 3年
- ☆銅 賞 「いろいろな記憶の回収屋」
小 屋 果 歩 兵庫県 小林聖心女子学院高等学校 1年
- ☆銅 賞 「Love in Snow」
根 亘 めぐみ 島根県 県立太田高等学校 2年

第8回 受賞作品

- ☆金の星賞 「昨日オバケ」
石 田 祐 也 群馬県 県立桐生高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「あめふるとき」
葛 生 明日香 千葉県 東京学館高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「当たり前のこと」
石 川 茉 耶 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「上弦の海」
上 岡 沙 都 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆銅 賞 「桜の舞う頃に」
小 林 明日香 埼玉県 秋草学園高等学校 3年
- ☆銅 賞 「空を見上げて」
川 上 小百合 千葉県 千葉国際高等学校 1年
- ☆銅 賞 「いちにち いちにち…」
吉 岡 佑里恵 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 2年
- ☆銅 賞 「名のない喫茶店」
吉 井 加 奈 神奈川県 カリタス女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「贈り物」
長谷川 礼 奈 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 1年
- ☆銅 賞 「天体観測～星になった少年～」
豊 原 彩 香 福岡県 県立筑紫丘高等学校 2年
- ☆銅 賞 「ノノ」
吉 井 史 歩 鹿児島県 県立鶴丸高等学校 3年

第9回 受賞作品

- ☆金の星賞 「うそつきねこムクリ」
吉 澤 仁衣那 群馬県 県立高崎東高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「うそつきと魂管理人」
藤 本 美紗子 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「トンボ池」
田 口 健 司 東京都 創価高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「SHEEP SLEEP」
長谷川 礼 奈 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 2年
- ☆銅 賞 「さいろの国」
工 藤 舞 子 青森県 県立弘前中央高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夏跡」
増 田 恵 美 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「赤鬼と正月」
北 田 ゆ す 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「コトバの国」
茂 木 まどか 山梨県 北杜市立甲陵高等学校 1年
- ☆銅 賞 「博士の愛したロボット」
八 箇 裕 子 富山県 県立大門高等学校 1年
- ☆銅 賞 「怪獣事件簿がくれたもの」
遠 山 奈津子 岐阜県 県立恵那農業高等学校 3年
- ☆銅 賞 「仔猫の唄」
水 船 愛英理 京都府 京都女子高等学校 2年

第10回 受賞作品

- ☆金の星賞 「机の中は空」
内 田 彩 香 埼玉県 本庄第一高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「霧川の童」
高 田 有優美 山形県 県立山形西高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「シルベル」
古 関 友梨香 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「アルクの大冒険」
坪 井 みづき 京都府 府立京都すばる高等学校 3年
- ☆銅 賞 「クウの手紙交換」
川 上 雅 子 宮城県 秀光中等教育学校 1年
- ☆銅 賞 「またたき」
水 野 秀成子 東京都 桐朋女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「ぼくたちのなつやすみ」
品 田 茉梨絵 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆銅 賞 「空色は恋」
西 山 萌 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆銅 賞 「もう一人の俺」
溝 口 達 康 京都府 府立京都すばる高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夢の中の大図書館」
金 川 絵梨花 兵庫県 武庫川女子大学附属高等学校 3年
- ☆銅 賞 「ビー玉水溶液」
佐々木 和 福岡県 県立筑紫丘高等学校 2年

第11回 受賞作品

- ☆金の星賞 「うちゅう人からのてがみ」
番 場 絵 里 茨城県 茨城高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「どうして」
川 上 雅 子 宮城県 秀光中等教育学校 2年
- ☆銀の星賞 「おばあちゃんのドライヤー」
上 田 侑 乃 埼玉県 浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「陽炎少年」
水 田 佳 奈 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆銅 賞 「涙の栓」
長谷川 愛 瑠 青森県 県立五所川原高等学校 1年
- ☆銅 賞 「恋色ラムネ」
中 野 沙 紀 岩手県 県立花北青雲高等学校 2年
- ☆銅 賞 「露玉花語」
高 田 有優美 山形県 県立山形西高等学校 3年
- ☆銅 賞 「見沼のやくそく」
松 藤 美瑛子 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 2年
- ☆銅 賞 「ひとりぼっちの王様」
石 坂 梓 東京都 東京女子学園高等学校 1年
- ☆銅 賞 「心の中の星空へ」
北 澤 友里恵 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 1年
- ☆銅 賞 「先生」
島 田 瑛 京都府 同志社女子高等学校 3年

第12回 受賞作品

- ☆金の星賞 「金色のカメ」
上 田 侑 乃 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「にこにこ」
長谷川 愛 瑠 青森県 県立五所川原高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「はじめの一步」
関 菜々美 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「かけこえは「泣き虫ヒーロー！」」
吉 岡 明日香 神奈川県 横浜共立学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「夏の終わり」
清水畑 央 岩手県 県立平舘高等学校 3年
- ☆銅 賞 「お姉ちゃんになった日」
小田島 夕 花 岩手県 県立花巻北高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お兄ちゃんに会いに」
似 内 萌 花 岩手県 県立花巻北高等学校 1年
- ☆銅 賞 「サンノ森」
川 上 雅 子 宮城県 秀光中等教育学校 3年
- ☆銅 賞 「カップの川流れ」
村 上 佳代子 宮城県 常盤木学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「人形語り」
坂 井 遥 香 福岡県 県立筑紫丘高等学校 2年
- ☆銅 賞 「月の花通りのかばん屋さん」
濱 田 鈴 鹿児島県 県立大島高等学校 1年

第13回 受賞作品

- ☆金の星賞 「シンフォニー」
原 尾 勇 貴 神奈川県 公文国際学園高等部 1年
- ☆銀の星賞 「鬼の子トキ」
上 田 侑 乃 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「アイーシャと奇跡の種」
大 場 あすみ 千葉県 麗澤高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「春の野のアレックス」
千 石 芙紀子 神奈川県 横浜雙葉高等学校 2年
- ☆銅 賞 「星にねがいを」
小田島 夕 花 岩手県 県立花巻北高等学校 2年
- ☆銅 賞 「茜色の空」
小長井 素 賢 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「優しさのカタチ」
関 菜々美 東京都 白百合学園高等学校 3年
- ☆銅 賞 「寛太日記」
藪 田 薫 理 東京都 白百合学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「特急蜻蛉——機三郎の手記より」
三 橋 克 馬 神奈川県 県立津久井浜高等学校 3年
- ☆銅 賞 「そして僕等は動きます」
夢 沼 理 紗 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夏の桜」
田 畑 奈 緒 鹿児島県 鹿児島純心女子高等学校 1年

第14回 受賞作品

- ☆金の星賞 「うまれる」
小田島 夕 花 岩手県 県立花巻北高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「蝉と花火」
山 寺 杏 奈 千葉県 西武台千葉高等学校 1年
- ☆銀の星賞 「金色の思い出一座敷わらしに会った秋ー」
吉 武 英 莉 東京都 白百合学園高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「僕を変えた夏休み」
歌 津 ま い 京都府 府立北嵯峨高等学校 3年
- ☆銅 賞 「木の山田さん」
柴 田 宏 大 北海道 小樽潮陵高等学校 3年
- ☆銅 賞 「深森奇譚」
松 村 美 里 東京都 鴎友学園女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「逃げないで、心」
戸 塚 紀 名 東京都 白百合学園高等学校 1年
- ☆銅 賞 「五年D組 深海クラス」
原 尾 勇 貴 神奈川県 公文国際学園高等部 1年
- ☆銅 賞 「鈴の音と天狗の山」
千 石 芙紀子 神奈川県 横浜雙葉高等学校 3年
- ☆銅 賞 「夏の終わり」
瓜 田 実 可 静岡県 県立清水南高等学校 1年
- ☆銅 賞 「ねずみのお化粧屋」
堀 井 柚 月 愛知県 県立西尾高等学校 1年

第15回 受賞作品

- ☆金の星賞 「めづ様」
佐 藤 礼 菜 岩手県 県立水沢高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「アイアン」
原 尾 勇 貴 神奈川県 公文国際学園高等部 3年
- ☆銀の星賞 「[いし] のライオン」
迫 田 知 樹 大阪府 府立岸和田高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「冬馬とカンタ」
田 中 春 日 兵庫県 県立洲本高等学校 3年
- ☆銅 賞 「恥ずかしがり屋の特効薬」
齋 藤 秀 仁 群馬県 県立高崎東高等学校 2年
- ☆銅 賞 「三人の子供」
徳 永 志 帆 東京都 大妻多摩高等学校 2年
- ☆銅 賞 「古本屋」
福 嶋 一 菜 神奈川県 県立鎌倉高等学校 1年
- ☆銅 賞 「お日様フルーツ」
岩 佐 菜々子 福井県 県立藤島高等学校 1年
- ☆銅 賞 「アルフレッドと鏡」
宮 澤 かれん 静岡県 県立御殿場南高等学校 2年
- ☆銅 賞 「信じる強さ」
森 内 千 裕 大阪府 府立農芸高等学校 1年
- ☆銅 賞 「キツネが鳴く時」
田 畑 奈 緒 鹿児島県 鹿児島純心女子高等学校 3年

第16回 受賞作品

- ☆金の星賞 「弱虫鬼ごっこ」
佐 藤 綾 香 岩手県 県立水沢高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「影隠し」
佐 藤 礼 菜 岩手県 県立水沢高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「ひとりで電車に乗った日」
内 田 夏 鈴 東京都 立教女学院高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「本の虫」
小 山 夏 子 神奈川県 カリタス女子中学高等学校 1年
- ☆銅 賞 「雪とうそつき」
小 河 碧 峰 群馬県 県立前橋女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「たまきのたましい」
菊 地 結 衣 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 1年
- ☆銅 賞 「かしの木の山」
木 村 かのん 東京都 聖心女子学院高等科 3年
- ☆銅 賞 「形或るもの」
羽 鳥 友 稀 静岡県 県立沼津東高等学校 2年
- ☆銅 賞 「とべない僕ら」
朱 宮 奈々葉 愛知県 県立一宮南高等学校 1年
- ☆銅 賞 「水色の秘密基地」
中 村 燎 平 福岡県 県立筑紫丘高等学校 2年
- ☆銅 賞 「あぶらあげ」
泉 侑 紀 熊本県 有明高等学校 2年

第17回 受賞作品

- ☆金の星賞 「知恵の神さま」
高橋 璃 来 北海道 標茶高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「二人のおじいちゃん」
肥 沼 由里子 埼玉県 浦和第一女子高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「猿の子」
加 藤 言 美 東京都 香蘭女学校高等科 1年
- ☆銀の星賞 「あたりめと金平糖」
小 山 夏 子 神奈川県 カリタス女子高等学校 2年
- ☆銅 賞 「線香花火が消えるまで」
友 清 佳 南 東京都 瀧野川女子学園高等学校 2年
- ☆銅 賞 「僕はアイスクリーム王子」
姫 野 友梨香 山梨県 駿台甲府高等学校 2年
- ☆銅 賞 「追憶」
長 倉 佑 夏 静岡県 県立吉原高等学校 2年
- ☆銅 賞 「コノハの不思議な夏」
朱 宮 奈々葉 愛知県 県立一宮南高等学校 2年
- ☆銅 賞 「少女と虹の橋」
佃 遥 佳 京都府 府立北嵯峨高等学校 3年
- ☆銅 賞 「8月のトレジャーハンター」
上 杉 ほのか 福岡県 県立筑紫丘高等学校 1年
- ☆銅 賞 「子狐の筆」
東 福 洋 美 福岡県 中村学園女子高等学校 3年
- 【学校賞】 同志社女子高等学校（京都府）
- 【奨励賞】 藤ノ花女子高等学校（愛知県）、翔凛高等学校（千葉県）

第18回 受賞作品

- ☆金の星賞 「セミのめけがら」
山 木 晴 香 大阪府 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 1年
- ☆銀の星賞 「狐とおばあさん」
西 部 響 京都府 府立北嵯峨高等学校 3年
- ☆銀の星賞 「竜の子」
藤 川 諒 子 徳島県 県立富岡東高等学校 2年
- ☆銀の星賞 「月とトマト」
瀬 口 愛 奈 福岡県 県立修猷館高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「くじら座の物語」
千 葉 滯 奈 岩手県 県立一関第一高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「ゆうたの夏祭り」
尾 下 陽 菜 東京都 女子学院高等学校 2年
- ☆銅の星賞 「ミレニアムドラゴンベイビー」
小 山 夏 子 神奈川県 カリタス女子高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「翡翠」
餘 吾 美夏生 神奈川県 県立茅ヶ崎北陵高等学校 2年
- ☆銅の星賞 「どんなに小さくても」
長 倉 佑 夏 静岡県 県立吉原高等学校 3年
- ☆銅の星賞 「月の手記」
山 本 彩 乃 広島県 広島市立舟入高等学校 1年
- ☆銅の星賞 「おじいちゃんとお魚様」
寺 地 菜々海 鹿児島県 県立川内高等学校 3年
- 【学校賞】 日本女子大学附属高等学校（神奈川県）
- 【奨励賞】 兵庫県立姫路工業高等学校（兵庫県）

第19回 受賞作品

- ☆金賞 「普通じゃない」
藤 川 諒 子 徳島県 県立富岡東高等学校 3年
- ☆銀賞 「二〇〇円のおぼけ」
廣 見 結 菜 広島県 福山暁女子高等学校 2年
- ☆銀賞 「悲哀のひまわり」
岡 本 沙慧可 山口県 梅光学院高等学校 3年
- ☆銀賞 「自販機」
大 城 涼 佳 沖縄県 県立小禄高等学校 2年
- ☆銅賞 「土澤駅」
梅 村 琴 音 岩手県 県立一関第一高等学校 1年
- ☆銅賞 「国と大蛇とこどもたちの話」
中 林 綾 音 群馬県 東京農業大学第二高等学校 1年
- ☆銅賞 「ゆうなぎのうた」
伊 藤 珠 花 埼玉県 県立上尾高等学校 3年
- ☆銅賞 「ちいさな森の物語」
仙 波 智 晴 富山県 県立高岡高等学校 2年
- ☆銅賞 「宝石のひとみ」
山 木 晴 香 大阪府 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 2年
- ☆銅賞 「熊狐物語」
岩 木 彼 方 岡山県 県立岡山一宮高等学校 3年
- ☆銅賞 「鈴ラムネ」
片 山 恵 熊本県 県立玉名高等学校 1年
- 【奨励賞】 神戸星城高等学校（兵庫県）

第20回 受賞作品

- ☆金賞 「縞猫」
賀 来 心 音 埼玉県 浦和明の星女子高等学校 1年
- ☆銀賞 「鯨のオーエン」
七 海 千 夏 福島県 尚志高等学校 2年
- ☆銀賞 「土産」
青 野 有 佳 石川県 金沢大学附属高等学校 1年
- ☆銀賞 「窓ぎわの友達」
柿 沼 希 実 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆銅賞 「さなぎびと」
富 樫 煌 北海道 北海道旭川東高等学校 2年
- ☆銅賞 「時計台」
牧 野 優 芽 北海道 北海道札幌国際情報高等学校 2年
- ☆銅賞 「名もなき羊飼いの話」
白 井 拓 斗 千葉県 県立柏高等学校 3年
- ☆銅賞 「物売りは値段を付けない」
土 屋 喜 楽 神奈川県 県立金沢総合高等学校 3年
- ☆銅賞 「空からのデリバリー屋さん」
落 合 紗也華 京都府 同志社女子高等学校 3年
- ☆銅賞 「仮面屋」
松 末 まどか 愛媛県 県立松山西中等教育学校 1年
- ☆銅賞 「トンボのおっさん一人旅」
岩 松 香 弥 福岡県 県立筑紫丘高等学校 1年
- ☆銅賞 「空の海の散歩」
宮 田 千 晴 鹿児島県 れいめい高等学校 1年
- 【学校賞】 同志社女子高等学校（京都府）
- 【奨励賞】 北海道札幌国際情報高等学校（北海道）

第21回 受賞作品

☆銀賞

「歳月を紡ぐ鳥」

熊 倉 友 音 東京都 かえつ有明高等学校 2年

☆銀賞

「ニセモノ」

深 澤 未知佳 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年

☆銀賞

「おはなしや」

樋 田 優 長野県 佐久長聖高等学校 2年

☆銀賞

「花の夢」

空 井 慧 愛知県 県立時習館高等学校 2年

☆銅賞

「ひとりぼっちの役者」

緒 方 翠 東京都 駒沢学園女子高等学校 3年

☆銅賞

「ことばの矢」

船 津 薫 子 東京都 創価高等学校 2年

☆銅賞

「生ゴミの大脱走」

千 葉 玲 美 東京都 中央大学附属高等学校 2年

☆銅賞

「桜色のワンピース」

降 矢 梨々花 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年

☆銅賞

「飛べないハヤブサ」

伊 東 咲 春 愛知県 県立時習館高等学校 2年

☆銅賞

「私の音楽の先生」

佐 藤 杏 耶 愛知県 藤ノ花女子高等学校 3年

☆銅賞

「夢見たあの世界」

国 村 ひなた 熊本県 県立玉名工業高等学校 2年

☆銅賞

「カラスのいえ」

福 島 嘉津穂 鹿児島県 県立川内高等学校 2年

【学校賞】 日本女子大学附属高等学校（神奈川）

【奨励賞】 時習館高等学校（愛知）

第 21 回 ノミネート記念作品

- ☆「また、白銀の頃に」
多 田 帆 香 岩手県 県立花巻南高等学校 1 年
- ☆「サーカスがくれた勇氣」
安 住 ひかる 宮城県 宮城学院高等学校 2 年
- ☆「決意を力に」
阿久津 瑞 希 栃木県 TBC 高等専修学校 3 年
- ☆「アマガエルとヒキガエル」
曾 篠 珠 伶 埼玉県 県立浦和第一女子高等学校 2 年
- ☆「大樹のミルク」
石 丸 結 菜 千葉県 県立清水高等学校 2 年
- ☆「ないものねだりのクラゲたち」
加 藤 清 葉 東京都 江戸川女子高等学校 2 年
- ☆「夢売りのほうき星」
川 崎 日 瑚 東京都 東京家政大学附属女子高等学校 3 年
- ☆「バターに溶けるビターな思い出」
吉 川 文 菜 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3 年
- ☆「モノクロの不思議な冒険」
杉 野 碧 神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3 年
- ☆「少年と老人」
青 野 有 佳 石川県 金沢大学附属高等学校 2 年
- ☆「放課後の掃除」
川 上 耀 誉 愛知県 藤ノ花女子高等学校 2 年
- ☆「止まない雨」
大 石 結 香 愛知県 藤ノ花女子高等学校 3 年
- ☆「僕と魔法のスケッチブック」
山 田 果 歩 京都府 同志社女子高等学校 3 年
- ☆「ぼくの手」
松 本 麻 由 京都府 同志社女子高等学校 3 年
- ☆「四本腕のブライト」
山 村 莉 世 京都府 同志社女子高等学校 3 年
- ☆「テオの夢」
山 口 彩 葉 兵庫県 県立加古川東高等学校 2 年
- ☆「死神とエラ」
湊 むつみ 奈良県 県立郡山高等学校 2 年
- ☆「壊れた時計のその先は」
吉 本 有 那 広島県 県立安西高等学校 3 年
- ☆「君だけの人生」
橋 本 京 華 山口県 県立防府商工高等学校 2 年
- ☆「森で一番星がきれいな場所」
神 田 伶 長崎県 県立長崎西高等学校 2 年
- ☆「ちりん～風鈴の約束～」
野 邊 咲也子 宮崎県 宮崎第一高等学校 1 年

選考委員

(五十音順)



石野

晶 (小説家)

岩手県出身。二〇〇七年に『パークチルドレン』で第八回小学館文庫小説賞を受賞し小説家デビュー。二〇一〇年には『月のさなぎ』で、第二十二回日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受賞。



牛崎

敏哉 (宮沢賢治記念館学芸員)

岩手県花巻市出身。学芸員、日本子どもの本研究会会員。絵本評論賞(すばる書房)、国民文化祭児童演劇脚本賞、「縄文まほろばの詩」大賞等受賞。また「劇団らあす」にて演劇活動を展開。



やえがしなおこ

（童話作家）

同人誌『びわの実ノート』（松谷みよ子責任編集）童話教室に学ぶ。『雪の林』で第十五回椋鳩十児童文学賞、第二十三回新美南吉児童文学賞を受賞。物語、絵本、紙芝居作品など。岩手県在住。



夏井

なつじ

敬雄

たかお

（富士大学教授）

岩手県久慈市出身。岩手県立総合教育センター教科領域教育室長、岩手県高等学校文化連盟文芸専門部長、岩手県立岩泉高等学校長、岩手県立大船渡高等学校長を歴任。「日本語の世界」等の講義を担当。

第一回からの受賞作品（金賞・銀賞）は、童話大賞
公式ウェブサイトに掲載しています。

<http://www.fuji-u.ac.jp/koukousei-douwa>



全国高校生童話大賞受賞作品集

発行日／2023年12月9日

発行／全国高校生童話大賞実行委員会
富士大学
花巻市
花巻市教育委員会

事務局／〒025-8501 花巻市下根子450-3 富士大学内
全国高校生童話大賞実行委員会事務局

◆本作品集に掲載の文章・イラスト等の無断転載を禁じます。